

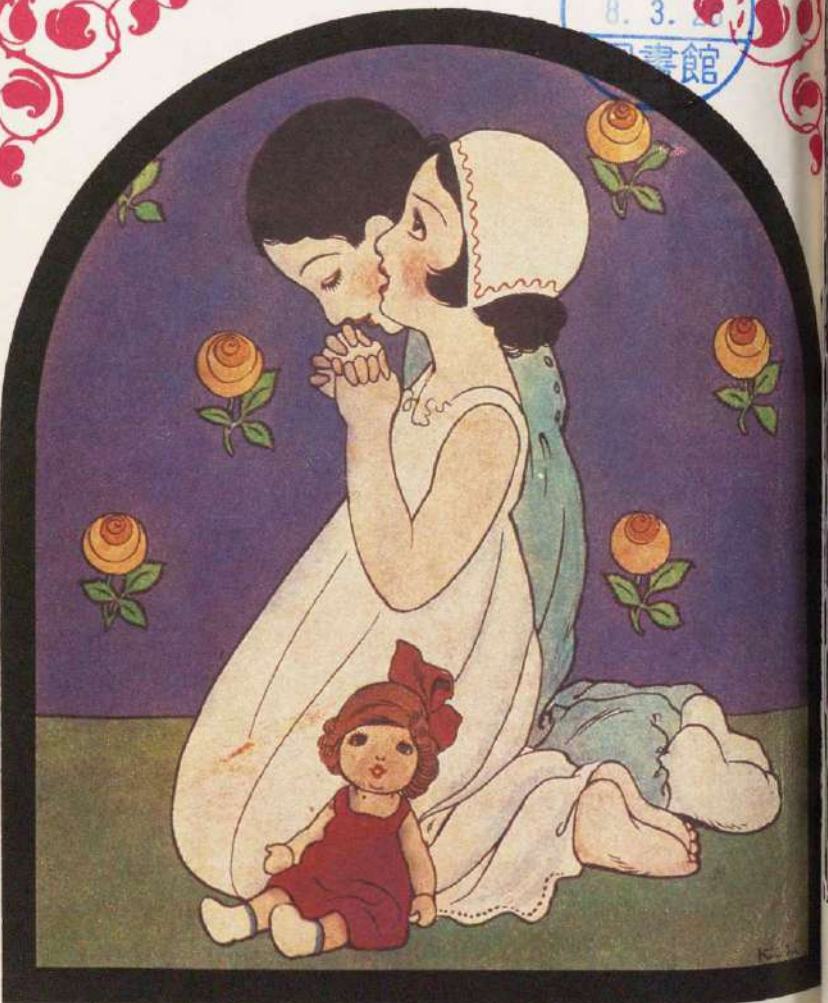
大正十一年九月六日印刷
大正十一年十月二日發行

金船社發行

722-B88

金の星

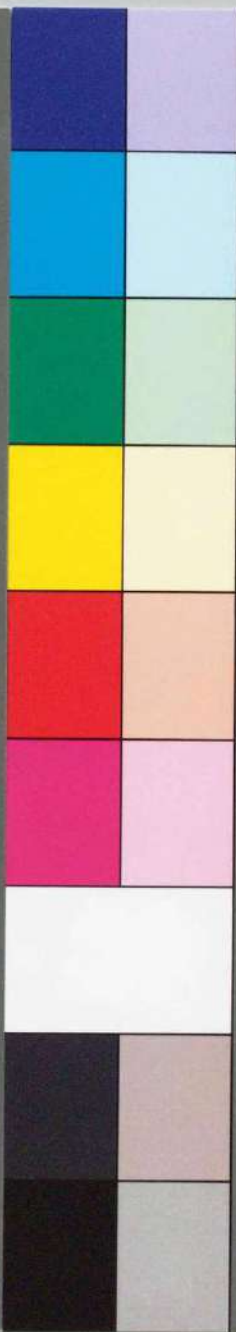
第十号 十月號



cm 1 2 3 4 5 6 7 8
inches 1 2 3 4 5 6 7 8

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

「たち映」に眼「術」藝の「人」邦「興」

ケピルカ

飲 滋
料 強



監 制
の 者
安

ソアアテム 園蘭波

青野伯一キヌミズビツ

刊 近

青

い

空

第 三 輯

・内容 一つお星さん、七つの子、鼯と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬、

・内容 青い空、つばめ、でんぐ虫、雁来紅、呼子鳥、雀の酒盛り、

刊 續 下 以

發 行 所

東京下谷上
野公園前三橋傍

金 の 星 出 版 部

振替東京五九五六番
電話下谷六八二二三番

大 販 次 書 店

東京市外
下目黒四六八

白 眉 出 版 社

振替東京五四五九八番

金の星童謡曲譜集

本居長世先生作曲

野口雨情先生作詞
岡本歸一先生装幀

◆菊版上等和紙
◆表紙七度刷
◆本文各色刷
◆定價各册六拾四錢
(送料四錢)

本居長世先生の作曲になつた野口雨情先生の童謡は、全国の學校に家庭にうたはれてをります。岡本歸一先生獨特の童畫も、全國到るところの少年少女諸君に深い親みをもつてをります。本輯は「金の船」當時より本誌上に掲載された野口先生の傑作童謡に、本居先生の作曲された名曲のみを集め、岡本先生が數月間苦心を重ねた木版七度刷の極彩色斬新な意匠になつたわが國不朽の名曲譜集であります。

新刊

人買ひ船

第一輯

内容 人買ひ船、子守唄、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん、

新刊

一つお星さん

第二輯

内容 一つお星さん、七つの子、鼯と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬、

近刊

青い空

第三輯

内容 青い空、つばめ、でんく虫、雁來紅、呼子鳥、雀の酒盛り、

發行所

東京下谷上野公園前三橋傍

金の星出版部
振替東京五九五六番
電話下谷六八二二三番

大取次書店

東京市外下目黒四六八

白眉出版社
振替東京五四五九八番

以下續刊

少年少女の童話讀本

第一 篇

赤い猫

◆ 沖野岩三郎先生著

◆ 岡本歸一先生裝幀及挿畫

◇三五判函入類美木
◇本文二百五十頁餘
◇口繪三色版外挿畫四頁
◇定價金壹圓
(送料六錢)

少年少女の讀物に最も深い注意をはらつてゐる歐米諸國が、模範的讀物として家庭に學校に推奨してゐるものは童話讀本であります。面白い童話の裡から人間として學ばなければならぬ事を教へたものが、此の童話讀本でありますから、最早歐米諸國には童話讀本でない讀本は一冊もないのです。ところが、今のわが國には悲しいかな、さういう立派な讀本がありません。現在讀本として用ひられてゐるものは、何れも讀んでゐて退屈を感じるやうな、所謂無味乾燥なものばかりです。

わが金の星出版部は早くから此の事に氣づいて、童話讀本の出版を計畫してをりましたが、少年少女の模範的讀物であるだけに、適當な作者を得る事に非常な困難を感じてをりました。所が、幸ひにしてわが出版部は此の出版界に記念すべき仕事の作者として、沖野岩三郎先生を得ることが出来たのであります。

幼稚園の園長として、また小學校の校長として、また教會の牧師として、且また童話作家の一人者として、長年の間少年少女の研究に没頭して居られる沖野先生を、此著の作者に擧げる事の出来たのは、わが出版部の一大名譽であります。

此の童話讀本の出版は、わが國學校讀本の大革命であるばかりでなく、また少年少女の讀物の一大福音である事は言ふまでもありません。この書が現れたことによつて、學校も家庭も、はじめて安心して、愛見の方々に讀物を與へることが出来るでありません。

第一篇として『赤い猫』が近日中に出版になります。引つゞいて、第二篇、第三篇と發行の準備中であります。

内容

十人の大將口熊と猪口山さち川さち口お八八杯口猩々長者口蚊帳の釣手口島の辨才天口武者修行口庄屋と代官口鎌倉権五郎口二つの寢床口隣の金太口金を描る話口赤い猫口その他

發行所

東京下谷上野公園三橋傍

金の星出版部

電話 下谷六八二二三番
振替東京五九五九六番

▲エキスポートライター三十二號 押出式又はムア式と云ふペン先出入は繰返式と殆ど同様エキスポート筆正十四金ペン付
市價價格 金五十六圓の特(現圖通り)
市場價格 金七十八圓の物正十八圓の對裝飾金輪二個付
大特價 金貳圓九拾五錢
大特價 金參圓八拾五錢



少女の童話讀本

少年少女の讀物に最も深い注意をはらつてゐる歐米諸國が、模範的讀物として家庭に學校に推奨してゐるものは童話讀本であります。面白い／＼童話の裡から人間として學ばなければならぬ事を教へたものが、此の童話讀本でありますから、最早歐米諸國には童話讀本でない讀本は一冊もないのです。ところが、今のわが國には悲しいかな、さういう立派な讀本がありません。現在讀本として用ひられてゐるものは、何れも讀んでゐて退屈を感じるやうな、所謂無味乾燥なものばかりです。

わが金の星出版部は早くから此の事に氣づいて、童話讀本の出版を計畫してをりましたが、少年少女の模範的讀物であるだけに、適當な作者を得る事に非常な困難を感じてをりました。所が、幸ひにしてわが出版部は此の出版界に記念すべき仕事の作者として、沖野岩三郎先生を得ることが出来たのであります。

幼稚園の園長として、また小學校の校長として、また教會の牧師として、且また童話作家の一人者として、長年の間少年少女の研究に没頭して居られる沖野先生を、此著の作者に擧げる事の出来たのは、わが出版部の一大名譽であります。

此の童話讀本の出版は、わが國學校讀本の大革命であるばかりでなく、また少年少女の讀物の一大福音である事は言ふまでもありません。この書が現れたことによつて、學校も家庭も、はじめて安心して、愛児の方々に讀物を與へることが出来るのであります。

第一篇として『赤い猫』が近日中に出版になります。引つゞいて、第二篇、第三篇と發行の準備中であります。

内容 十人の大將口熊と猪口山さち川さち口お八八杯口狸々長者口蚊帳の釣手口島の辨才天口武者修行口庄屋口鎌倉権五郎口二つの寢床口隣の金太口金を掘る話口赤い猫口その他

發行所 金の星出版部
東京下谷上野公園三橋傍
電話 下谷六八二二三番
振替東京五九五九六番

節約一トスエと一テ約節

▲エキストラ二十一號 安全装置インク止式十四金ペン付エポナイト袖破損防備純銀鍍ニケ所付(特許三分八厘九)

市場価格 金四圓内外の物(現圖通り)

大特價 金貳圓也

▲エキストラ三號 安全装置インク止式 正十四金鍍輪付エポナイト袖正十四金ペン付(特許二分七厘九)

市場価格 金貳圓五拾錢内外の物(現圖通り)

大特價 金壹圓四拾錢

▲エキストラ十三號 安全装置インク止式 正十四金鍍輪付エポナイト袖正十四金ペン付(特許二分七厘九)

市場価格 金貳圓五拾錢内外の物(現圖通り)

大特價 金壹圓四拾錢

▲エキストラ二十一號 安全装置インク止式十四金ペン付エポナイト袖破損防備純銀鍍ニケ所付(特許三分八厘九)

市場価格 金四圓内外の物(現圖通り)

大特價 金貳圓也

▲四拾餘種類 平和記念東京博覽會に於て業界一流多數 造家即賣店中弊所が販賣高の第一位を示せしは即ち弊所の標的たる品質本位薄利主義の眞價を認められたる結果に外ならず茲に目録送呈 謹で感謝の誠意を表す

◆弊所責任 一本品は御買の上貴意に適合する時は即時返金(大抵他品と交換又は代金返金致しました、本廣告と相違の節は天下の人氣エキストラ一年筆に集中 品質本意薄利多主眼とするので、萬年筆の人氣を一時に集中したキストラ一年筆は御買の上貴意に適合する時は即時返金(大抵他品と交換又は代金返金致しました、本廣告と相違の節は十拾餘のクリツブに代添附す)

▲キストラ一年筆は御買の上貴意に適合する時は即時返金(大抵他品と交換又は代金返金致しました、本廣告と相違の節は十拾餘のクリツブに代添附す)

▲キストラ一年筆は御買の上貴意に適合する時は即時返金(大抵他品と交換又は代金返金致しました、本廣告と相違の節は十拾餘のクリツブに代添附す)

▲キストラ一年筆は御買の上貴意に適合する時は即時返金(大抵他品と交換又は代金返金致しました、本廣告と相違の節は十拾餘のクリツブに代添附す)

▲キストラ一年筆は御買の上貴意に適合する時は即時返金(大抵他品と交換又は代金返金致しました、本廣告と相違の節は十拾餘のクリツブに代添附す)

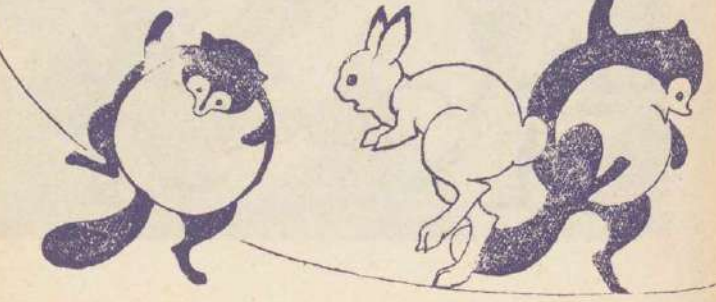
エキストラ一年筆 東京 小石川區原町 電話 東京三八〇一〇番 明盛進堂製作所
小石川四四六番

目次

おいのり(表紙・草紙歌)……………岡本 歸一
 お人形の夢(口繪・三色版)……………野口 雨情
 お人形さんの夢(曲譜・童謡)……………小島政二郎
 盗坊(童話)……………小山内 薫
 煙草のはじまり(童話)……………三宅 房子
 家なき子(名作童話)……………藤澤 衛彦
 十人お稚兒(傳説)……………沖野岩三郎
 水汲み(童話)……………元 齋藤佐次郎
 鬼に唾をかけられた話(童話)……………三内藤 豊雄
 餘所の國(童話)……………北 田 初子
 馬鹿の三太郎(童話)……………窪田 空穂
 辨慶と義經(史傳)……………



武者修(幼年詩)……………藤野 英次
 日水たまり(幼年詩)……………永 橋 大介
 悪い王様と禍の話(童話)……………天宮島 資夫
 草の音(童話)……………宮人見 東明
 さんざんざ(幼年詩)……………若山 牧 水選
 馬(綴り方)……………編 輯 部 選
 清いぐみ(童話)……………五山 本 鼎選
 トンボの一生(少年自作童話)……………野口 雨 情選
 パラ子さん(少女自作童話)……………梅 田 三 良
 『金の星』講演部報告……………野 村 蝶 子
 通 信……………
 (附 録)
 長篇物語 父戀し(第九回)……………沖野岩三郎
 沖で呼ぶ聲……………





お人形の夢

岡本歸一書

お人形さんは

今でも鳳仙花の

夢を見る

お人形さんは

ガラスのお窓の

夢を見る

「お人形さんの夢」の三頁を御覧下さい。



作大
曲補增

童謠集

十五夜お月さん

第十版

台覧

▼野口雨情先生著

四六判函入類美本上製挿畫作曲入音譜
十二曲附定價金一圓三十錢送料十五錢

- ▽先生の傑作童謠七十餘篇と作曲擬譜十二曲を加へたる真に空前の一大童謠集にして又作曲音譜集也。各地女學校小學校は勿論各階級の家庭より日々
- ▽註文増しつゝあるは寔に偶然には非ざるなり、愛兒兄弟の爲め必ず一書を備へらるべし

文部省認定の吾國唯一の光榮ある良書!!

▼野口雨情先生著 (本文三百頁に近い全部悉く童謠作り方の手引)

童謠作法問答

中形版脊クコース上製全一冊
定價金一圓 送料金十錢

發賣忽ち八版を賣り盡さむとす、以て内容の優れたるを知るに足らむ

交蘭社

東京市神田區仲猿樂町七十
振替口座東京四〇二七九

發行所



蓄音器観心むじ

夜の明月る波に呀
ぬらなはてく無
ドーコレ印鷺

し出賣譜新月九

御註文番號	曲種	曲目	演奏者
五三八四	曲	三十三間堂(柳)	三浦環女史
五三八五	曲	上下	ピアノ伴奏 フランケツツクテイ
五三八六	曲	磯節	新富町 清原わか
五七二二	喜劇	江戸土	三味線一若
五七一七	喜劇	吾妻草紙 (裏面三枚ツマキ)	大阪會我道家 五郎一座
五七三〇	新劇	魔風	同
五七三三	催請	博多節	博多水茶屋
五七四三	同	上下	お新
五七四六	同	同	同

全國到處信用ある
蓄音器店は悉く
蓄音レコードの賣店なり

株式 日本蓄音器商會

りあドーコンスタンダキ白面外のこ

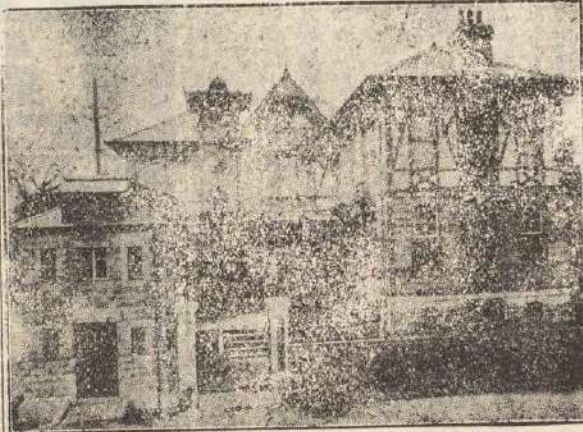


天下の青年は大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新しいから
- 會費が安いから
- 指導が良いから
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が速いから

會長 尾崎 行雄

學監 文學博士 山内 繁吉
新學博士 三宅 博士
顧問 井上博士 浮田博士
岡田前文務大臣



創立以二十年

記念大特典提供
目下新學期開講

入會の絶好機

講義録見本つき
規則書無料送付

一人前の男となるには

さうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はさうしても生存競争の勝利者たることは六ヶしい。併し家庭の事情で中學に入れない者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャレンジャー出来てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗のある講義録で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

大日本國民中學會

振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇三
新田三〇〇三
新田三〇〇三

お人形さんの夢

本居長世作曲

おにんぎょさんの心は
おにんぎょさんはいま
しのおうちには
でもほうせんわいのゆめ
おまど
ほうせんわいがつばいの
おにんぎょさんはガラスの
おまどのおいそをみる

江口千代子女史作
口繪河上挿繪十葉 裝畫武井武雄氏
四六判紙裝 二百二十頁
定價一圓貳拾錢 送料四錢

少女對話集

十二篇の餘興にふさわしい
學藝會の對話を集めたもの
で讀んで面白く演じるの
本です
お話のみで評判の新刊書
氣な優しい麗しい面白
草のやうな感情が交り無
有の絹糸のやうな神々若
篇の相対のやうな女性特
長編童話桃色の王女十一
長編童話桃色の王女十一

この書は幼い人々に深い親しみと経験を持たるゝ女史が小供達本意の題材を用かてなるべく解り易い言
葉でやさしい感じをそのまゝ書きつづられたもので装畫も感じよく出来ました。内容は「不思議な葡萄
を始めた」と「霧とヒョーキ」『電氣國旅行』「金ちやんと重」など十一編のお話でもどれも面白くて
を芽ぐませずには置かないものばかりです。それは皆さんが一寸この本をお手に取つて御覽になればす
ぐにおわかりになる事と信じますから世の少年少女諸子の前にお薦めいたします。

最新刊 童話集 不思議なぶどう

口繪 地獄見物
挿繪 五葉
四六判石版紙裝
クローム金文字
紙數百九十餘頁
定價金壹圓
送料六錢

遠藤しげの女史作 秋田雨雀先生序 裝畫白山卓吉氏

發行所 東京 東口 新布 網一丁 目二 竹内書店 取賣全書 店名 欄次



お人形さんの夢

野口雨情

お人形さんの

昔のお家は

ガラスのお窓

鳳仙花が

一杯 お庭に

咲いてゐた

お人形さんは

今でも 鳳仙花の

夢を見る

お人形さんは

ガラスのお窓の

夢を見る



盗坊

小島政二郎

一 今

僕と一しよに大學を出て今或大きな會社に勤めてゐる友達に、伊達正雄といふお洒落があります。今年の春、會社から大へん澤山な賞與金を貰つて喜んで、早速上等の洋服を拵へた外に、ふだんから欲しい／＼と思つてゐた金時計とブラチナのくさりを買ひました。それでもまだお金が澤山残つてゐたので、會社のかへりに一人でお料理屋へはひつて、うまいものをどつさり食べて、夜遅くたつて一人で歸つて行きました。

ところが、伊達君の家は、電車をおりてから、暗い寂しい道を、二三町も歩かなければ

ならない所がありました。それも、でこぼこした坂道で、右は大きなお屋敷の石垣、左は大きな谷を隔て、遙か向うに上の平な、禿山が聳えてゐると云つたやうな、東京の市内にもこんな寂しいところがあるのかしら、と思はれるくらゐ眞暗な道でした。

しかし、朝晩通ひ慣れてゐるので、伊達君は別にこはいとも寂しいとは思はずに歩いて行きました。まして今日は新調したばかりの上等の洋服を着て、足には、これも誂へて昨夜出来て来たばかりの仔山羊の、一足毎にキュック／＼と柔い音を立てる靴を穿いて、少し酔つて、その上、ポケットにはまだ澤山お金が入つてゐる、——いや、それはかりではない、酔つた人にはお誂へ向きの夜風がそよく、頬を撫でて行くと云ふのですから、こはい寂しいどころか、伊達君はい、心持で歩いてゐました。歩きながら、伊達君は、ブラチナの鎖をいちくつたり、用もないのに金時計を暗闇の中を出して見たり、お金のはひつてゐる上着のポケットを外から抑へたりしながら、絶えずにこ／＼笑つてゐました。

と、突然、目の前に、眞黒な男がぬつと立ち現れたかと思

ふと、

「やい。」と云ひながら、いきなり、ビシヤツと、伊達君の頬を殴りました。伊達君は目から火が出たかと思ひました。

「俺は盜坊だ。電車の中から貴様に目を付けて来たのだ。金時計に、ブラチナの鎖、金もどつさり持つてゐるらしい。さあ、素直にみんな出せ。逃げようつたつて逃すものか。聲でも立て、見ろ、貴様の命はないぞ。」

相手は低い、しかし力の籠つた聲でかう云つて威しました。威されなくとも、伊達君はもうさつきの一殴りで、度肝を抜かれてゐました。酔ひもさめてしまつたし、逃げたくも足がブル／＼顫へてどうにもなりませんでした。聲も出ませんでした。

相手はこつちの黙つてゐるのに腹を立て、

「黙つてゐるのは不承知だと云ふのだな。よし、そんなこつちにも覺悟があるぞ。」

かう云ひながら、大きな拳を握めてそれへ唾を吐きかけて、今にも殴りかゝらうといふ身がまへをしました。その權幕を見ると、伊達君は急に聲が出るやうになりました。

「いや、不承知ぢやありません、不承知ぢやありません。」と云ひながら、急いで金時計とブラチナの鎖とを外して盗坊に手わたしました。

「よし。——これは大分重いな。両方で二百圓もしたらう。は、は、は。」

盗坊は受け取りながら、さも得意さうに聲を立て、笑ひました。

伊達君は、盗坊の様子を見て、金時計とブラチナの鎖とだけであんなに喜んで、お金の方を忘れてくれなにかしらと思ひました。で、「どうか忘れてくれますやうに……。」と神さまにお祈りをしました。

しかし、盗坊は時計と鎖とを自分の洋服の右のポケットへ仕舞ひ込むと、

「何をぐづくしてゐるんだ。早く金を出さないか。金を……。」と、叱りとばすやうに云ひました。

伊達君はおや／＼と思ひながら、仕方がなしに、お金を出して渡しました。

向うへ歩いて行つてしまひました。

伊達君はがっかりして、うなだれたまゝ、両手を横い服の両方ポケットへ突つ込みました。すると、何か指先に當るものがありました。急いで右の手の方を引き出して見ると、今の今、盗坊に捲き上げられた金時計とアラチナの鎖とでした。左の手を引き出して見ると、それはお金でした。盗坊は服を取りかへる時に、一たん自分のポケットへ仕舞ひ込んだものを出すのを忘れたのです。結局、伊達君は洋服を損じただけで、跡はうま／＼と取り戻すことが出来た譯です。

「は、は、は、こいつア面白いや。は、は、は、こいつア有り難いや。」と、伊達君は、さつき盗坊が笑つたのよりもつと／＼大きな聲を出して笑ひました。

「しかし、盗坊の奴も今頃氣がついて、取り戻しに引つ返して来るかも知れないぞ。さうだとすると、こんな所で笑つてなどはゐられない。」

さう氣のついた伊達君は、急に笑ふのを止めて、どん／＼駆け出しました。しかし、考へて見ると、盗まれた者の方が

はず澤山持つてゐるな。は、は、は……。」

盗坊はこんなことを云つてまた笑ひました。さうして今度は左のポケットへお金を仕舞ひ込んでしまひました。

伊達君はこれで済んだのだらうと思つてゐましたが、盗坊は俄に思ひ出したやうに、

「さう／＼、貴様はい、洋服を着てゐるな。ついでにそれも脱いで行け。」と云ひました。

「これだけは許して下さい。まさか裸では歩けませんから……。」

驚いて伊達君がかう云ふと、
「脱げと云つたら脱いで行け。その代りには俺の服を譲つてやる。」

盗坊なんといふものは、どこまで都合のいいことを考へてゐる者だらうと伊達君は感心しながら、いや／＼ながら洋服を脱いで渡しました。こつちが上着を脱いで渡すと、向うでも上着を脱いでくれます。チヨツキをやると、チヨツキをくれます。と／＼ズボンの取りかへこも済みました。最後に、盗坊は山高帽子まで奪つて得意然と反りかへつてボカ／＼と

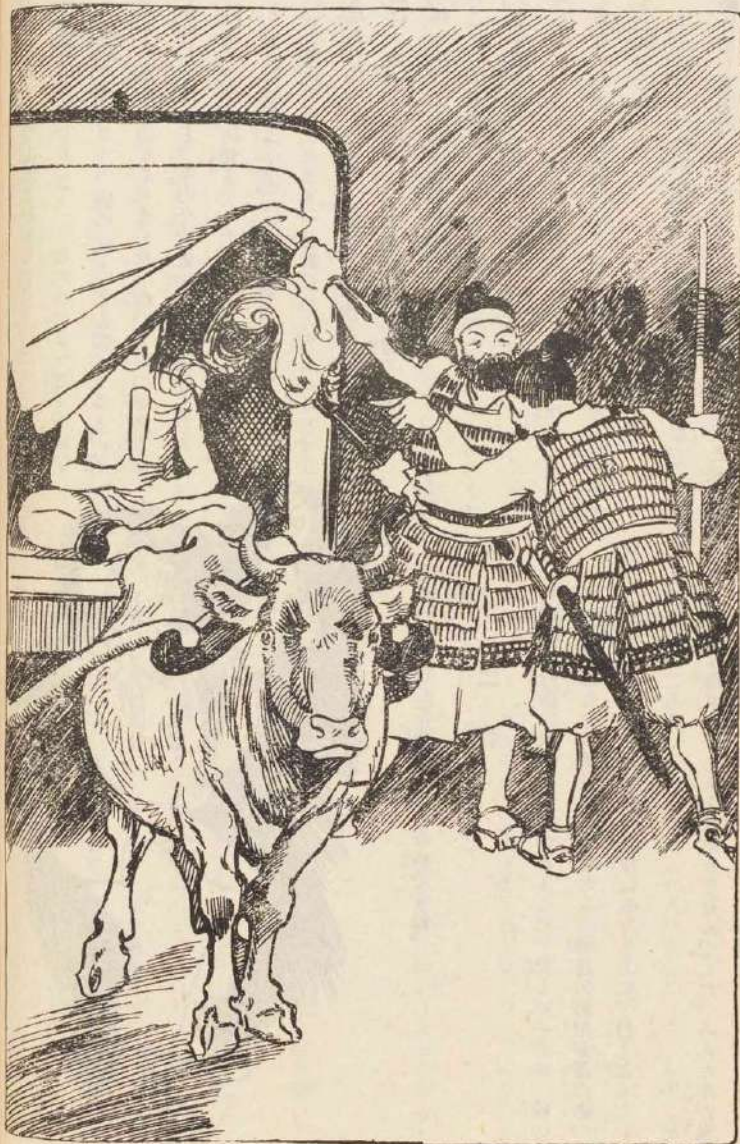


逃げ出すなんて随分をかきな話ですね。

二 昔

京都に阿蘇の史といふ人がゐました。史といふのは、役の名で、あまりいゝ役ではありません。朝廷の御用が澤山あつた爲めに、その日は歸りが夜中になりました。月も星もない真暗な晩でした。

大昔は馬車といふものではありませんでした。みんな牛が曳



いたものです。のろ／＼と牛に曳かれながら、車の中で阿蘇の史は、今夜あたり道で盗坊に出逢ひはしまいかと考へました。さう考へると、心配になつたので、早速装束をすつかり脱いで疊んで、車の中に敷いてある疊の下に隠して、その上に裸のまゝで坐つてゐました。車の前には、簾が垂れさがつてゐました。

車はがた／＼揺れながら、二條の通りから美福門の前を通つて、土塀つゞきの町へかかりました。すると、向うから、闇に赤い松明を持った、こはらしい髯の男が四五人、白刃を抜いて近づいて來ました。

それを一目見るなり、牛の綱を曳いてゐた重は勿論のこと、車のうしろに付き従つてゐた二三人の下男共まで、逸早く逃げ失せてしまひました。

盗坊の頭は、車に近寄ると、垂れさがつてゐる簾を刀の尖で掲げて中を見ました。すると、史が裸のまゝ、頭には烏帽子を被り、足には靴足袋を穿き、手には笏を持つて坐つてゐました。この様子がいかにもおどけてゐました。

「はゝゝ……みんな見ろ。をかしいぢやないか。裸に烏帽

子を被つて笏を持つて濟ましくさつてゐる。——おい、裸の大將、一たい、どうしたと云ふのだ。」と、今までこはらしい顔をしてゐた盗坊の頭が、笑ひながら尋ねました。

「東の大宮を通りかゝると、君達の仲間が寄せて來て、みんな装束を剝ぎ取つて行つてしまつたのです。」と、史はわざとやつぱり眞面目な顔をして、笏を胸の前にピツタリ構へながら、上官に物を云ふやうにわざと丁寧にかう答へました。すると、うまく史の計略が當つて、その眞面目な所がをかしいと云ふので、盗坊達は、

「あはゝ、あはゝ……。」と、腹をかゝへて笑ひながら、
「それちや多分多襄丸が先き廻りをして此奴の装束を剝いだのだらう。や、思はぬことで時間を無駄にした。さ、早く北へ下らう。」

かう云つて、みんなは松明を打ちふり／＼行つてしまひました。

そのうしろ姿を見送りながら、史は、
「はゝゝ、さまを見ろ。いくら強くとも、智慧には叶ふまい。」と、呟きました。(をばり)



煙草のまじり

小山内薫

むかし、むかし、印度の或田舎に、二人の男の子が住んでゐました。二人は大變仲がよくて、少しの間も離れてゐるといふ事が出来ない程でした。

一人は名をウ・リウバと言つて、國中で一番といふ金持の家の坊ちやんでした。もう一人は名をウ・バヅクと言つて、至極貧しい家の子供でした。しかし、家の好い悪いといふ事は、二人の子供の仲の好い事には、なんの妨げにもなりませんでした。

二人は毎日つと一緒になつて、野原や森をうろつき歩きました。そして、一緒に鳥の鳴くのを聞いたり、一緒に花の咲いてるのを摘んだりしました。一緒に川で泳ぎを習つたり、一緒に弓の稽古をしたり、一緒に笛を吹いたりしました。二人の好きな遊びも同じなら、二人の好きな友達も同じでした。やがて、二人が大きくくなりました。そして、もう先のやうに、いつも一緒にゐる事が出来なくなりました。ウ・リウバはお父さんの田畑を見廻らなければなりませんでした。ウ・リウバのお父さんの持つてゐる土地は、宏大なものでしたから、この役目にかかると、ウ・リウバは数日も村を留守にし

ました。貧乏人のウ・バヅクは又ウ・バヅクで、毎日野らへ出て、貧しい両親の手助けもし、自分の食べる米をも働いて儲けなければなりませんでした。しかし、子供の時の仲好しは、若い者になつてからも變りませんでした。二人はお互を信じ合つて、どんな内證事でも打ち明けて話し合ひました。

やがて、二人は二人ともお上さんを貰つて、二人とも家の主人になりました。ウ・リウバのお上さんは、ウ・リウバの家と同じやうに、或金持の家の娘でした。それ故、ウ・リウバは、お上さんを貰つた爲に、なほ村で勢力を得るやうになりました。前よりもつと金持になりました。貧乏人のウ・バヅクは、自分と同じやうに貧しい家の娘を貰ひました。そして、遠くの方の村へ引つ越して行きました。勿論、ウ・リウバのやうな金持にはなれませんが、それでも、ウ・バヅクは幸でした。ウ・バヅクのお上さんは心の優しい、暮らしに倹しい女でした。二人は毎日、一緒に田畑へ出て、肩をならべて、せつせと働きました。そして、食へて行けるだけのものを稼ぎました。

かういふ境遇になつたので、二人はもうめつたに會へなく

なりました。それでも二人の心は少しも離れませんでした。それどころか、年の経つに連れて、二人を結びつける絆は、ますます堅くしまつて来るばかりでした。

時々、ウ・バヅクは、昔の知合や友達を訪ねに、自分の生れた村の方へ旅に出かけました。さういふ時、いつも一番ウ・バヅクを歓迎して呉れるのは、古い友達ウ・リウバでした。ウ・リウバは、ウ・バヅクを出来るだけ長く自分の家に泊めて、出来るだけ立派な御馳走をしました。かうして、二人は又新しく愛し合ひ睦み合ひました。

或時、ウ・バヅクがウ・リウバを訪ねて、いつもの通り幾日か滞在して、それから家へ歸ると、お上さんが待ち構へてゐて、さも口惜しさうに、かう言ひました。

「近所の人があるたとウ・リウバさんの事を大層悪く言つてゐますよ。全體、ウ・バヅクにそんな金持の友達がある筈はない。ほんとに、そんなに仲の好い友達があるなら、いつもこつちからばかり訪ねずに、たまには向ふからも訪ねて来さうなもんだ、なんて言つてゐるんですよ。」

ウ・バヅクは、これを聞くと心を痛めました。自分の事を

「悪く言はれたのが口惜しかったのではありません。自分の大事な友達が馬鹿にされたやうな気がして、それが残念で堪らなかつたのです。そこで、ウ・バヅクは、どうしても一度友達を自分のところへ招待しなければならぬと思ひました。間もなくウ・バヅクは父生れ故郷をたづねました。そして、いつものやうに友達のもとへなしを受けました。その時、ウ・バヅクは思ひ切つて、かう言ひました。

「僕はいつも君に會ひに来て、君の御馳走になるが、君はまだ僕が嫁を貰つてから、一度も訪ねて来て呉れないね。」

すると、ウ・リウバが答へました。
 「それはほんとだ。だが、どうか悪く取らないで呉れ給へ。君も知つてる通り、僕は中々用事が多いので、さういふ楽しみをする暇がないのだ。しかし、まだ一度も君を訪ねないといふのは、どう考へて見ても、失敬だ。早速たづねよう。どうか細君に宜しく言つて呉れ給へ。そして、あしたの朝、君達を訪問する旅に立つから、どうかその事をも細君に傳へて置いて呉れ給へ。それから、是非カレエリスの御馳走に預りたいから、その事も傳へて置いて呉れ給へ。」

ウ・バヅクはこれを聞くと、ひどく心を痛めました。そして、かう言ひました。
 「友達に御馳走をする食べ物一つ得られないとは、何といふ情ない世の中だ。おれは生きてゐるのが厭になつた。死んだ方が餘つ程好い。」



これを聞くと、ウ・バヅクは大層喜んで、大急ぎでその事を傳へに、お上さんのところへ歸つて行きました。そして、お上さんに、どうか出来るだけおいしい御馳走がして貰ひたいと言ひました。お上さんも、ふだんから始終話に聞いている御亭主の親友が自分のところへ訪ねて来ると聞いて、一時は大層喜びましたが、やがて心配さうな顔をして、かう申しました。

「あんまり不意なので、なんにも支度が出来てゐません。實は、今、お魚も、お米も家にないのです。」

「それは困つたな。」と、御亭主が申しました。「だが、おれ達はここへ来てから、まだ一度も近所の人の世話になつた事がないから、近所の人に頼んで見たら、その位なものは貸して呉れるだらう。一つ頼みに行つて見て呉れないか。友達が出来た時に、なんにも食べ物が出せなくては恥だから。」
 そこで、お上さんは、御亭主の言ひつけ通りに出かけて行きました。しかし、村中一軒残らず頼んで歩いて見ましたが、米一合魚一疋分けて呉れる人はありませんでした。お上さんは失望落着いて、家へ歸つて、その事を御亭主に話しました。

さう言ふかと思ふと、ウ・バヅクは、いきなり短刀を取り上げて、われとわが胸を突きました。そして、死んでしまひました。
 やさしい御亭主が死んだのを見ると、お上さんは悲しみの餘り聲を揚げて泣きました。

「かうなつては、もうあたしも生きてゐるかひはない。死んだ方が餘つ程増しだ。」
 さう言ふかと思ふと、今度はお上さんが短刀を取り上げて、われとわが咽喉に突き立てました。そして、死んでしまひました。

丁度、その晩、ウ・ノンツといふ名高い泥棒が、その村へはひり込んで来ました。ひどく寒い晩だったので、泥棒は寝靜まつたところの家へ忍び込んで、火にあたりたいものだと思ひました。
 泥棒は、ウ・バヅクの家へ火の燃えてゐるのを見ました。そして、家の中のしんとしてゐるのを確めました。
 「よく働く奴等だと見えて、ぐつすり寝込んでゐるな。」泥棒は、かう獨語を言ひました。「ここなら、安心して、火に

あられさうだ。」

さう言つて、泥棒はウ・バツクの家へ忍び込みました。そして、自分の直ぐ側の土間の上に死骸が二つ横になつてゐるのも知らずに、圍爐裏の側に躡つてゆる／＼手足を暖めました。

泥棒のウ・ノツは直ぐと好い心持になつて、思はずぐつすり寢込んでしまひました。

朝になつて目が覺めると、びつくりして逃げ出さうとしましたが、その時、泥棒の目についたのは、ウ・バツク夫婦の死骸でした。泥棒はのけぞるばかりに驚きました。そして、急に體がふる／＼慄へて來ました。

「おれは何といふ不仕合せな人間だらう。村の者はきつとおれがこの二人を殺したのだと言ふだらう。いくらおれがきつてはないと言つても、ふだん評判の悪いおれの事だから、誰も取り上げて呉れる者はあるまい。村の者に捕まつて、人殺しだと言つて殺されるよりは、自分で死んでしまつた方が餘つ程好い。」

さう言ふかと思ふと、泥棒はいきなり庭戸を取り上げて、



われとわが腹を突き通しました。そして、死んでしまひました。

かうして、三つの死骸が、枕をならべて、土間の上に横になりました。それがどういふわけだと言ふと、唯この家に友達に御馳走をする食べ物がかつたからなのです。

日が高くなつても、ウ・バツクの家の中がしんとしてゐるので、近所の者が不思議に思つて、覗いて見ると、死骸が三つ列んで横になつてゐるので、びつくりしました。近所の者は、自分達が前の晩に食べ物を買つてやらなかつたから、こんな事になつたのだらうと思つて、みんな口には出しませんが、心では悪い事をしたと思ひました。

おひる頃になると、ウ・リウバが、約束通り訪ねて参りました。そして、この悲しい出来事を聞くと、聲を揚げて泣きました。

ウ・リウバは親友の死骸に縋りついて、泣きながら、かう申しました。

「ああ。世の中といふものは、なぜかう貧しい人に辛く當るのだらう。友達に御馳走をしようといふその美しい志が重

荷になつて、たうとうこんな事になつてしまふとは。」

ウ・リウバは長い間泣いてゐました。そして、神様に、貧しい人が、身を苦しめずに人をもてなす事の出来るやうに、幾度も幾度も祈りました。

丁度、その時、神様が世の中の出来事を見廻りに入らつしやいました。そして、ウ・リウバの泣いてゐるのを御覽になると、ひどく可哀さうに思ひ召して、かう仰しやいました。

「それでは、これから、人をもてなすのに都合の好いものを生やしてやらう。それを使へば、貧乏人でも金持でも、苦勞をしないで友達を御馳走する事が出来るのだ。」途端に、死骸の三つ横になつてゐる土間から、今まで人の見た事もない木が三本生へて來ました。それは薬醬とパンの木と烟草とでした。

その時からこの方、印度では、貧しい家でも、金持の家でも、友達が訪ねて來ると、薬醬の質とパンの質と、それから烟草に火をつけて出すのが、禮儀の一つとなりました。(なほり)

にゐても何も出来やしないからね。』

『せめてお前のやうな子供が二人もゐれば、どうか巧く行くのだが、老人がたつた一人で、男の子をつれただけでは疎なことは出来ない。一層私がめくらになつてゐるとか、骨でも折れてゐれば、またどうにかなるのだが、しかしお上のお助けを受けてゐるやうな恥しいことはいやだ。そこで私は、お前を冬の終りまである親方のところへ預げようと思つた。その親方は、お前を外の子供達の仲間に入れてくれるだらう。お前はそこで、堅琴を弾けばいいのだ。』



『さうして、あなたは……』と私は訊ねました。『私はバリーへは度々来てゐるので顔を知られてゐる。私は廣告さへすれば、ぢきにイタリヤの子供達を集めることが出来る。その子供達に大道で堅琴やヴァイオリンを弾くことを教へてやるのだ。その間にセルシノとすの冬中暮さなければならぬのでせうか。』

三

バリーの町は深く入れれば入る程私が空想してゐたものと違つてゐました。溝が町の中を流れてゐて、そこからは、何ともいへない臭い息が立てゐました。またその邊の小さな見世のガラス月には、荷車ではれとばされた泥が、一ぱいくつついてゐます。たしかにバリーはいやな町だと思つた。居酒屋が深山にあつて、大勢の男と女がガア／＼いつてお酒を飲んでゐるのです。

親方はこの邊の案内をよく知つてゐると見えて、せまい往來にこみ合ふ人の中を分けて進んで行きましたが、大きな路地を通り抜けると、一軒の大きな家の前に出ました。その家は目が一度もあつた事のないやうな、汚い、じめ／＼した家でした。私はこんなひどい家を見た事ありません。親方はその家へ入つて行きました。ランプが微かに光つてゐる下で、一人の男がぼろをいぢつてゐました。

ルスの代りになつた犬を二匹めつけて慣さうと思ふ。それから春になつたら、ねエ、ルミーまた一しよに出かけようよ。まあ當分は勇氣と忍耐が必要だ。これまでは苦しい時ばかり通つて来たが、春になればだん／＼萬事が楽になるから、そこで私がお前をつれてドイ

ツやイギリスを廻るつもりだ。私はお前にいろいろのことを教へて立派な人間にしてやる。私はそれをミリアン夫人とも約束した。お前は體も丈夫だから、必ずいかに運が開けるに違ひない。』

『ガロフオリさんはゐるかね。』と親方がその男にたづねると、

『知らないよ、上つて見て來な。階子段の一番でつべ。』だ。それから鼻の先きに見えてゐるぢやないか。』と答へました。親方は教へられた通り階段を昇つて行きましたが、のぼりながら『ガロフオリといふのは、ルミ、お前に話した親方のことだよ。ここがその家なのだ』といひました。その階段には泥がこち／＼に積つてゐて、今にも足をすべらしさうになりました。この町といひ、家といひ、梯段といひ、まア何といふ氣持の悪いことだらう。一體、こんどの親方といふのは、どんな人なのだらう、と私は思ひました。

四階のつべんに上つて扉をあけると、殿倉のやうな大きな屋根裏の部屋に出ました。がらんとした部屋のまはりに襦袢が十二列べてありました。壁も天井も、一度は白かつたこともあつたのでせうが、今では煙と煤とゴミで汚れかまつて、何ともいへないやな色をしてゐます。壁の上には盛で人間の首だの、

れども、この上親方に心配をかゝるのは悪いと思つて黙つてをりました。

親方は私に泣きこをいはれると辛いと思つたか、念いで歩き出しました。私は引ずられるやうな氣で後について行きました。

間もなく汚い橋を渡つて川を越すと、一つ村に入りました。村がつきると、野原になりました。野原には汚い家があつちにも、こつちにもあつて、往來には荷車が行つたり來たりしてゐました。野原がつきると、長い長い町に入りました。兩側には見渡す限り汚ない小さな家が並んでゐます。かき集められた雪が道端にたんでありますが、その上へ腐つた野菜や、灰や、いろ／＼の汚い物が棄て、あります。いやな臭ひがしてむせるやうです。その中を荷車がこゝろ通つて行きます。

『こゝは何處です。』と、私はききました。『バリーだよ。』

これが見たい／＼と憶れてゐたバリーなのか。何處に大理石の家や、黄金の木や、立派な着物を着た人がゐるのでせう。私はこんな處で親方が別れて、……カヒと別れて、こ

花や鳥だのが樂書してあります。『ガロフオリさんはおゐるかね。』と親方は訊ねました。『あんまり暗くつて誰も見えやしない。私はピタリスだよ。』と親方はまたいひました。薄ぐらいランプが壁にかけてあります。その明りで部屋の中をすかして見ましたが、誰もゐないやうです。すると元氣のない聲で『ガロフオリさんは出かけましたよ。二時間程たなれば歸りませんよ。』と返辭する聲がして、誰か出て來る聲がしました。

出て來たのは十三ばかりの少年でした。私はその少年の奇妙な様子にびつくりしてしまひました。頭がなぐつて、足からすぐに首が生えてゐるやうな愉快をしてゐるんです。頭ばかり大きくつて釣合も何もとれてゐません。しかし、その顔を見てゐると、妙に人をひきつけるところがあるので、悲しいやうな、やさしいやうな、それから頼りないやうな顔付きをしてゐるので。『たしかに二時間たつては歸つて來るのかね。』と親方がたづねました。(つづく)



水汲み 沖野岩三郎

朝鮮の平壤府に申といふ一家がありました。その家は代々
 飾屋を職業としてゐましたが、主人の澤庵が亡くなつてから、
 今年十六歳になる逸遷といふ一人の子供が、まだ十分でない
 技倆ではあるが、親の職業を嗣いで、毎日こつ／＼と金や銀
 の飾物を造つてゐました。

或日の事、逸遷のおツ母さんが、市場へ買物に行つて歸つ
 て来る途中、支那の兵隊さんが何千人となく、隊を組んで町
 へ入つて来るのを見ました。

「あんなに多勢の兵隊さんが、何の爲に此町へ入つて来たの
 ですか？」

傍に立つて眺めてゐる人に訊きますと、

「大變な事になりました。近いうちに日本兵と支那兵とが、
 此の町で衝突しますぞ。」と答へました。

「エッ？ それでは戦争ですか？」

おツ母さんは色を蒼くして言ひました。

「あなたは知らないんですか。もう日本軍は牡丹臺から十里
 程離れた所へ来ましたよ。」

「まあ、さうですか？」

町ばかり離れた所にある薬水井へ、水汲みに行き
 ました。叔母さんは其水を飲む度に、

「アア旨しい、これは薬水だ。これさへ飲んでゐれば、薬は
 服まないでも、私の病氣は直ぐ癒る。有難い／＼。」と申し
 ました。

所が或日の事、逸遷はいつものやうに水を汲みに行きます
 と、そこには二人の日本兵が立つてゐました。

産れて始めて日本の軍人を見た逸遷は、吃驚して二十間は
 かり此方から、ちつとその軍人を眺めてゐました。

赤い帽子、真鍮色の鉞、黒い帯革、それは皆な逸遷の目に
 珍らしいものでした。殊に腰に吊してゐる短い剣は、それが
 軍人であるといふ總ての證據だと思ひました。

逸遷は少々恐ろしく思ったが、勇氣を出して井戸の傍へ行
 きますと、

「こら、水を汲みに来てはいけない！」と言つて一人の兵卒
 は手をふりました。

逸遷には兵卒のいふ言葉は解りませんでした。けれども、
 水を汲むなといふ意味はよく解りました。

言つたまゝ用意して、家へ走り歸つたおツ母さんは、入口の
 所から、

「逸遷や、大變だよ。近いうちに此町で、日本軍と支那兵と
 の大戦争があるつて、さうなると何んな事になるかも知れま
 せんから、早く田舎の叔母さん所へ逃げませう。焼討なんか
 に會つては大變だからネ。」と申しました。

逸遷は驚きました。で、其晩にお客様から引受けた仕事を
 一生懸命に片付けて、それを翌朝、頼まれた人達の所へ持
 つて行つて渡して置いて、それから家財道具の主なものを持
 造りして、田舎にゐる叔母さんの家へ逃げて行きました。

丁度その時、叔母さんは風邪の氣味で寝てゐました。

「おう、申か、能く来て呉れたナ。近いうちに、此のあたり
 で日本の兵隊と、支那の兵隊とが戦争をするつて聞いてゐる
 ので、心配してゐた所だ。まあ／＼お前達が来て呉れたら、
 それで私も安心だ。まさかの時には、あの向ふの岩穴へでも
 逃げ込むさ。」

叔母さんはさう言つて喜びました。そこで逸遷母子は叔母
 さんの所で厄介になる事になりましたが、逸遷は毎日々々三

「どうぞ、此の瓶に一杯だけ汲まして下さいまし。」
 逸遷は頭を下けて頼んでみました。けれども兵卒は、
 「いけない！」と喚鳴りました。で、逸遷は空瓶を頭に載せ
 て、すざくと歸りました。

「叔母さん、薬水井の所には日本の兵隊さんが二人立ってる
 て、水を汲ませて呉れやせん。兵隊さんは腰に剣をぶら下け
 てるます。」

逸遷は悲しそうな顔をして申しました。

「さうか、あの井戸は瓶に二十杯も水を汲むと、もう濁つて
 了ふから、それで日本の兵隊さんが、張番をしてるんだら
 う。では、明日の正午頃になつて、一杯汲んで来て下さい。
 それまで私は我慢しますから。」

叔母さんはさう言つて、濁いた唇を舐め廻して、枕もと
 にあつた茶碗の水を、大事さうに一口飲みました。

所がその夜の十二時過から叔母さんは、俄かに熱を出して
 ひどく苦み初めました。

「薬水、薬水を下さい。」
 叔母さんは苦み初めたり喚び續けましたが、もう汲んで来た水



は一滴もありません。

「叔母さん、僕はこれから行つて汲んで来てあげますから。」
 逸遷は元氣を出して、水瓶を頭に載せました。そして表の
 戸を押開けて外を見ますと、折悪しくその夜は、空が曇つて
 眞暗闇です。

「逸遷、一寸お待ち、餘り暗いやないか。」

おッ母さんは後から逸遷の袖を引張りました。

その時でした、向ふの山の頂上で、どん！ と鐵砲が鳴
 りました。

「呀！ 戦争だ！」

おッ母さんは逸遷を抱へるやうにして、座敷へ連れ戻りま
 した。

山からは、どん！ どん！ と大砲のやうな音が響いて來
 ました。

「さア、戦争だ！ 岩穴へ逃げませう。」

叔母さんは、苦しい病を忍んで起上りました。

「だつて、叔母さん、此の暗いのに……」
 言つてゐるうちに、日本の兵隊らしい多勢が、ばた／＼と

家の裏を、藪の底面の方へ起つて行く音が聞えました。

で、三人は燈火を消して息を殺して、黙つてゐました。

暫くして五六町離れた牡丹臺といふ岩の所で、わあー
 ツー！ と叫ぶ人聲が聞えました。

三人は闇の中に、ぶる／＼顫へてゐましたが、叔母さ
 んは急に、

「あッ！」と言つて板敷の上に倒れました。

「どうしました？ えー 叔母さん！」

逸遷は叔母さんを抱き起しました。おッ母さんは恐る
 恐る燈火をつけていろ／＼と介抱しましたが、夜明方に
 なつて、やツと、

「逸遷！ 薬水を下さい。薬水を……」と言ひました。

「叔母さん、汲んで来てあげます？」

逸遷は瓶を提げて表へ出ました。

「逸遷、危くはない？」

「大丈夫、おッ母さん、安心して下さい。」

逸遷は薬水井の方へ走りました。その時はもう夜がす
 ツかり明け放れて、山の青草が涼しい朝風に吹かれて静

かに動いてみました。

「旨い！ 誰も居ないぞ！」

逸選は口の中で叫び乍ら、井戸の傍へ走って行きますと、さア大變です。そこには日本の兵隊さんが三人仰向に寝てるではありませんか。しかし折角此處まで来たのですから、一杯だけ汲まして貰はうと思つて、

「もし〜、水を汲まして下さい。」と聲をかけますと、三人の兵卒は一度に起き上つて、

「いけない！」と云つて手を掉りました。

「叔母さんが病氣なんですから、どうぞ一杯だけ汲まして下さい。」

逸選は手を合せて拜むやりに言ひました。すると、三人の兵卒の中の一人が、朝鮮語でかう言ひました。

「此水は一滴も與る事はならないんだ。しかし病人があるなら可哀さうだから、一杯汲ましてやらう。」

逸選はそれを聞いた時、涙を流して喜びました。で、瓶を井戸の中へ沈めようとしますと、三人の兵卒は、前に立塞が

「待て〜。」と言ひました。

「汲んでは悪いのでございますか。」と逸選は頭へ乍ら訊きました。

「汲む事はならないんだ。けれども、お前は可愛い子供だから一杯だけ汲ましてやるんだよ。しかし我々は大将の命令で此の井戸を張番してゐるんだから、此儘汲んで行つてはいけない。」

一番年上の鬚のある兵卒は朝鮮語でさう言ひました。

「では、どうすれば宜しいんです？ お金を差上げませうか。」

逸選は涙を流し乍ら言ひました。

「お金？ そんなものは要らない。」

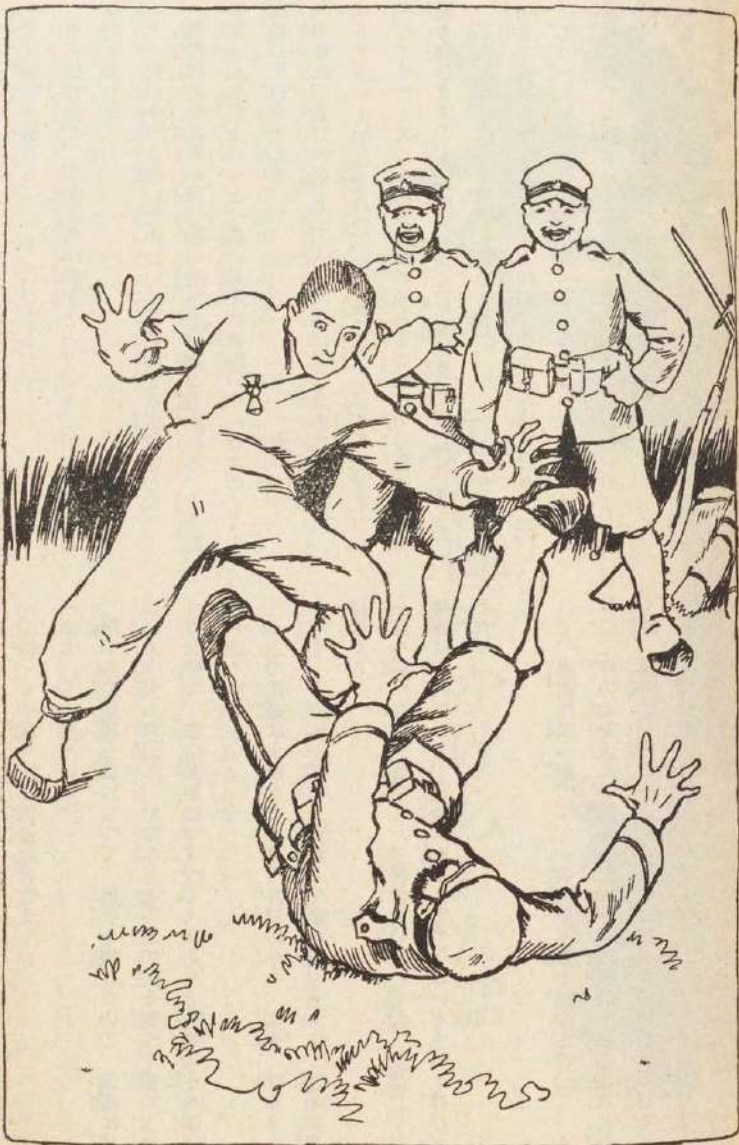
「では何を差上げませう？」

「何にも要らないが、此の三人と相撲を取つて、若しお前が勝つたなら、三杯だけ水を汲ましてあげる。」

「相撲を？」

「さうだ、此の三人と相撲を取るんだ。」

他の二人の兵卒はにこ〜、笑つてゐました。逸選は勇氣を出して、



「では相撲を取ります。」と言ひました。
それは逸遷が、朝鮮相撲の脚懸というのを、やつた事があ
るからでした。

「さア来い！」と若い色の白い兵卒は両手を廣げました。

逸遷はその兵卒の脚の股の所へ右の腕を差入れて、力を籠
めてうんと釣上げると、若い兵卒は葱畑の中へひよろ／＼と
踉蹌けて行きました。

「負けた、負けた。」と二人の兵卒は言ひました。

「さア来い！」と今度は色の黒い鼻の圓い兵卒が言ひました。

「やア！」と言つて逸遷は前の通り右の腕に力を籠めてその
股を拘ひますと、鼻の圓い兵卒は見事に真仰向に倒れました。

二人の兵卒は手を拍つて笑ひました。

「さア来い！」と最後に年上の鬚のある兵卒は言ひました。

此の一人を倒せば、水が貰へるんだと思つたので、逸遷は
必死になつて組付きました。そして、五分十分揉み合ひまし
たが、たうとう逸遷は畑の中へ捻ぢ伏せられました。

「負けたらう、水は汲ませないぜ！」と鬚の兵卒は笑ひ乍ら
申しました。

「では、も一度！」と逸遷は言ひました。

「よし、も一度来い！」

鬚の兵卒が屈み腰になつて、両手を廣げたので、逸遷は前
に二人を倒した通り、いきなりその右の股を拘つて撥ね上げ
ましたので、鬚の兵卒は、すつてんころりと草原の中へ横に
倒れました。

そこで逸遷は水瓶を取上げて井戸の中へ、素逸く沈めまし
た。そしてそれを頭の上に載せて駈け出しますと、鬚の兵卒
は後から、

「家へ歸つたら、直ぐもう二杯汲みに来い。八時になつたら、
僕達は交代だから、其後は暫く汲まれないぞ！」と呼びま
した。

で、逸遷は家へ歸つて、一番大きな瓶を持つて行つて、そ
れに二杯の水を汲んで歸りましたが、最後の一杯を汲みに行
く時、逸遷は、箱の中に入れてあつた小さい蠟石の印材を三
つ持つて行つて、お禮の印だと言つて三人の兵卒に與けまし
た。(なほり)



鬼に唾をかけられた話

齋藤 佐次郎

京都に一人のお侍が居ました。十二月の大晦日の晩おそ
くなつて一條の堀川の橋の上を通りかゝると、向ふの方から
大勢松火をつけてやつて來ました。

「偉い方のお通りなのだらう。」と思つたお侍は、こんな
處にゐてお答をうけてはいけなと思つて、忿ぎ足にもどつ
て橋の下にかくれました。

川には水がほんの少しがありませんでしたから、橋の太い
杣のかけに立つて待つてゐました。

間もなく松明をつけた行列は、橋の上をどか／＼と歩いて
行きます。

「一體、何様のお通りなのだらう。」

さう思つたお侍は、伸び上つて橋の上の方を見た時、思
はず「あッ」と叫んで顔色を變へました。お侍はぶるぶ
る顔へだしました。

橋の上を通るのは人間ではありません。鬼の行列でした。
角を生やしてゐるものもあるし、目が一つのもあるし、手が澤

山にあるのもあるし、一本足でとんで歩いてゐるものもあります。お侍は生きた心地もありませんでした。橋杵のかけに體をびたりくつつけて、小さくなつて、がた／＼顛へてゐるばかりでした。

その内に鬼の行列は向ふへ行つて了りました。まアよかつたと思つて、お侍は橋の下から出ようとすると、後からおくれて四五匹の鬼が話しながら来るのをヒョイと見ました。鬼の方でもお侍を見ました。

「あッ！人影があるぞ、つかまへろ。」と一匹の鬼が叫んだので、二匹の鬼が駆出して橋の下へ下りて来て、たうとうお侍をつかまへてしまひました。そして、橋の上まで引つぱつて行きました。

「どうしよう、殺してしまはうか。」と、一匹の鬼がいひました。

すると、外の鬼が

「しかし、別段悪い事をしたのでもないから命だけは助辨してやらう。その代りかうしてやらう。」といつて、ぶツと唾をお侍の顔へ吐きかけました。

てぬます。それどころか、おかみさんはお侍の姿へ見えないと見えて、

「まア、いやだ、どうしたのか知ら。誰もるやしない。……誰が戸をたゝいたのだらう。」



それを見た外の鬼は、それが丁度いゝ罰だと思つたのか、一度にぶツ／＼と唾を吐きかけました。さうしてお侍をそこへ突倒すと、そのまゝどん／＼行つてしまひました。

お侍は「まアよかつたー」と思ひました。命だけ助かつて本當にありがたかつたと思ひました。しかし、身體や頭が妙に痛くつてたまらないので、橋の上に倒れたまゝ、暫くは起き上ることも出来ないで、ちつとそのまゝ倒れてゐました。

そのうちに、向ふを見るともう鬼の行列は遠くの方へ行つて了つてゐます。松明の焰が木の間を通つて行くのが微かに見えてゐます。お侍はホツと安心して、身體の痛いのを我慢して起き上りました。そして、自分の家の方へ歩きました。

二

お侍は自分の家へ歸つて來ましたが、もう夜中なので、家では戸を閉めて寝てしまつてゐました。お侍はトン／＼と戸をたゝきました。すると、おかみさんが起きて來て戸を開けました。

「今歸つて來たよ。遅くなつて濟まなかつたね。」とお侍はいひましたが、おかみさんにはちつとも聞えないやうに黙つて、さういつて、戸を閉めてしまはうとするのです。お侍はあわて、

「おい／＼、私だよ、私だよ、お前何をほんやりしてゐるのだよ」と大聲にいつて、おかみさんの肩をたゝきました。けれども、おかみさんの方では一向に平氣で、たうとう戸を閉めてしまひました。

お侍は驚きました。一體どうしたのだらうと思つて見ましたが、不思議でなりません。そのうち、

「あゝさうだ、自分は鬼に唾をかけられたので、この世の人には、姿が見えなくなつてしまつたのだ。」と、氣がつきました。

さう思ふと、お侍は悲しくてたまりませんでした。明日になつても歸らなかつたら、おかみさんは自分のことを人に殺されてしまつたと思ふに違ひない、と思ふと悲しくなつて、お侍は一人で其處に泣いてゐました。

いつまでも泣いてゐましたが、そのうちにふと、神様にお願ひして見ようといふ氣になりました。平生から京都の六角堂の觀音様にお詣りをしてゐましたから、その晩のうちに直

ぐと六角堂へ行つて、お籠りをすることにしました。

お侍は十四日の間熱心に観音様にお祈りをしました。どうかも一度姿の見える人間にして下さいましと熱心にお祈りをしたのです。お腹がへると、お堂にあがつてるお供物を食べたりしてゐましたが、姿が見えないので、お侍のゐる事を誰も知りませんでした。

丁度、十四日目の終りの満願の朝でした。うつ／＼と眠つてゐると、一人の聖いお坊さんが、お堂の奥から現れて、お侍の傍に立ちました。

「あなたは夜が明けたら直ぐとお堂を出て外へ行きなさい。そして、途中であふ最初の人のいふ通りになさい。」とお坊さんがいつたかと思ふと、夢がさめました。お侍はとび立つ程に喜んで、夜のあけるのを待ち兼ねて外へ出ました。

しばらく歩いて行くと、向ふから大きな牛をひいて牛飼人が来ました。こはい顔をした男でしたが、傍まで来た時、

「おい、私と一しよに來ないか。」と、いひました。

お侍は、夢のお告げはこの人だと思つて喜びました。



それに、聲をかけてくれたところを見ると、自分の體が見えるやうになつたのぢやないかとも思つて、嬉しくつて嬉しくつてなりませんでした。

牛飼人の後について十町ばかりも行くと、大きな門のあるお屋敷の前に来ました。まだ門の扉がしまつてゐます。

牛飼人はひいて來た牛を門のところへゆはへつけて置いて、それからお侍の手をとつて、

「お前も一しよにこの扉の隙間から入れ。」といひました。お侍は驚きました。

「こんな狭い隙間からどうして入れるのです。」

「何でもなく入れるのだから、私と一しよに入れ。」

牛飼人はさういつて、お侍の手をぐん／＼ひつばつて扉の隙間を入つて行きました。なるほど何でもなく入つて行きました。

お屋敷の中では、昨夜は家中の人が誰も眠らなかつたと見えて、みんな起きてゐて騒いでゐます。お姫様が今日明日も知れないひどい御病氣なので、大騒ぎをしてゐるのです。お

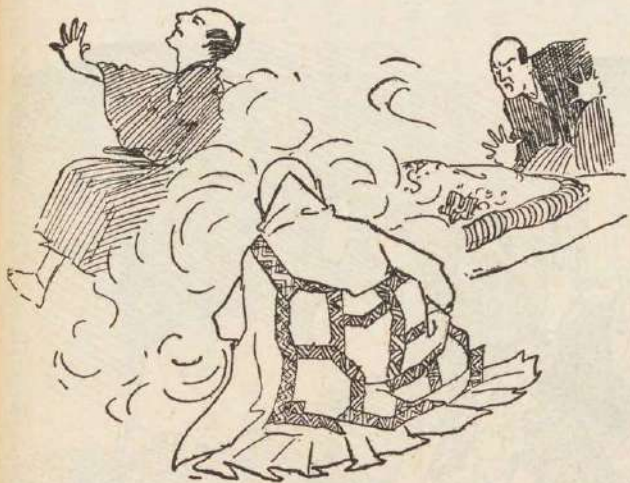
姫様の寝てゐる傍にはお父様やお母様や、大勢の女達がついて看病をしてゐました。

牛飼人とお侍は、お姫様の寝てゐる廣いお座敷へづか／＼入つて行きましたが、姿が見えないので、誰も知らずにゐます。

牛飼人はお姫様の枕もとまで來ると、小さな櫛の木の櫛を出して、これでもつてお姫様を打つとお侍にいひました。お侍はこの男のいふ通りにしなければいけないと思つて、櫛をもつて可哀さうなお姫様の頭や腰をコツ／＼たゞきました。

お姫様はヒイ／＼聲をたてゝ苦しみました。それでも牛飼人はそばにゐて、

「もつと打て、もつと打つのだ。」と言ひつけてゐます。お姫様の苦しむの見たお父様やお母様はぢつとしてゐら



れませんでした。急いで清水のお坊さんを呼びに使を出しました。

三四

使の男は、あわて、お坊さんと呼んで来ました。

清水のお坊さんといふのは聖い方でした。お姫様から少し離れたところにきちつとお坐りになつて、心経といふ有難いお経を静かにお讀みになりました。

お侍はその聲を聞くと、ぞつとして身の毛がよだつやうに思ひました。ぞく／＼と身ぶるひがして来ました。牛飼人もその時まではぢつと踏みとまつてゐましたが、たうとう我慢が出来ないで、こそ／＼と逃げるやうに何處かへ行つてしましました。

お坊さんは心経を讀み終ると、今度は護摩を焚きました。大きな容器の中に焚木を積んで、それに火をつけて、不動様のお経を唱へてお祈りをしたのです。焚木はぼう／＼と燃え上りました。お坊さんの聲は殿かにひびきました。

お侍は居ても立つてもゐられなくなりました。手に持つてゐた繩をそこへ投げ捨て、逃げ出さうとしますと、護摩の火がひよいと着物にうつつて、燃えはじめました。お侍はあ

わて、もみ消さうとしましたが、消さうとすればする程度がつて、たうとう體中火につままれてしまひました。

お侍は聲を擧げて、おん／＼叫んでもだえましたが、遂にそこへ氣を失つてばつたりと大きな音をさせて倒れてしまひました。お侍は、その時、はじめて人間の姿になつて人の目に見えるやうになつたのです。

傍にゐた人達は驚きました。妙な音がしたと思つてゐる處へ、ひよつこり一人の男が現れたのですから、その驚きはどんなだつたでせう。四五人の家來が出て行つて、すぐとつかまへてしまひました。

「どうしてこゝへ来たのだ。」と、家來の一人が大聲でいひました。

「どうぞ御勘辨下さいまし。」と、お侍は夢中であやまりましたが、自分の姿がはじめて人の目に見えるやうになつたのだと思つて、嬉しくて堪りませんでした。

「どうして不意に現れたのだ。」と、また一人の家來がいつたので、お侍は、はじめて我に返つて、すつかりの話をしました。

聞かしてゐた人達はびつくりして、お互の顔を見合せました。が、さういへばなる程お姫様の御病氣は魔物があなくなつてからすつかり樂になつたと見えて、すやく／＼と眠つておいでになりました。

お姫様のお父様やお母様は喜びました。

「有難うございます。聖いお経の力で魔物どもは行つてしまひました。もうこれで、二度と来ることはございますまい。」といつて、幾度もお坊さんにお禮をいひました。

その時、お侍をつかまへてゐた家來の一人が、

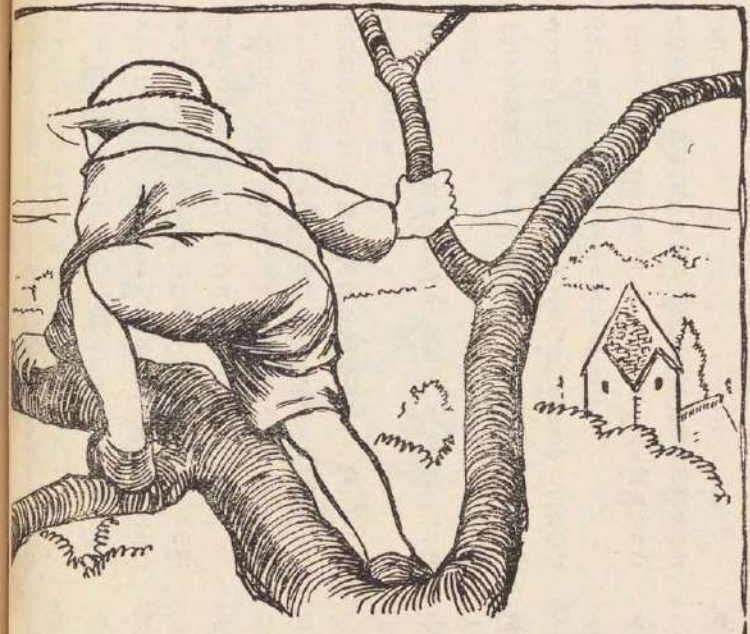
「お坊さまに伺ひます。こゝにゐる魔物はどういたしたらよろしうございます。」ときゝますと、

「その男には少しも罪はありません。六角堂の觀音様の御利益で再び人間の姿に返れたのですから、咎めるのは許してすぐ家に歸してやつて下さい。」と、いはれました。

家來達は聖いお坊さんの言葉ですから、すぐお侍を許しました。

お侍はどんなに喜んだこととせう。そのお屋敷を出ると急いで自分の家の方へ歸つて行きました。(おはり)

三五



よその國

内藤 豊雄

櫻の幹にのぼつたは
 僕達ちひちやな子供だけ
 両手で枝につかまつて
 眺め見渡すよその國
 すぐ日の前におこなりの
 花でかざつた庭がある
 今までに見た事もない
 たのしい場所が澤山見える



さなみ立て、流れる川や
 鏡のやうな青い空
 人が往つたり來たりして
 ほこりの立つた道まで見える
 もつこ高い木に登つたら
 もつこ遠くが見えるだらう
 大きな川の流れ込む
 海には船が浮いてゐる
 兩側の道がどこまでも
 お伽の國までのびてゐる
 そこでは五時に御馳走たべて
 玩具はみんな生きてゐる

(スライアンソン)



馬鹿の三太郎

北田初子

三太郎といふ、馬鹿な若者がありました。もうお嫁さんをもらはなければならぬ年になつたので、両親もいろいろ心配して、人にたのんで馬鹿といふことを内密にして、すこし、はなれた村からお嫁さんをもらひました。そのお嫁さんは近所でも評判の利口ものでしたから、三太郎が馬鹿だとい

ふこと知つてゐる人たちは大へん氣の毒におもひました。嫁さんもお嫁に來て初めて三太郎が馬鹿だと知つた時、ほんとに悲しくなりましたけれども、「いや、私がかういふ人のところへ來るやうになつたのもみんな神様や佛様の御心なのだ。」と考へて、それから三太郎や姑たちの世話をよくいたしました。ですから三太郎の両親も涙を流してよろこびました。

ある日、それはお嫁さんの家にお目出度いことがあつたので、三太郎はお嫁さんと一しよに行かなければなりませんでした。それで三太郎は三太郎に申しました。「貴方はまだ私の家を御存じありませんから、私が先へ行つて道々粗穀をまいて行きませう。貴方はその上をあるいていらつしやい。さうすればわかりますから。」

あとへ猫がやつて來まして、一寸繻子からみましました。猫はそれを足からとらうとがきましたので繻子をぐんぐんひきました。こちらは三太郎。靜にたべてゐるのに急にぐんぐんぐんぐんひつはられるので、これは急いでたべろ、といふのかとおもつて、お汁もお魚も、

た。三太郎も支度をして、そのあとから粗穀をふんで行きますうちに、橋のところまで來ました。見ると粗穀が風に吹き飛ばされてみんな川の中に浮いて居ました。三太郎はなんでもお嫁さんが粗穀の上をふんで來いといつたんだからとおもつて、チャブ、水の中心をあるいて行きました。

さてお嫁さんの家へつきますと、お嫁さんはさつきからまつてゐましたのですぐ出迎へましたが、三太郎が着物のすそを濡らしてゐるのを見て驚きました。「まあ、あなたは着物をどうなさいました、そんなに濡らして—」三太郎は橋の下に粗穀のあつた話をいたしました。お嫁さんは溜息をして申しました。「ほんとに貴方も困つた方ですね。その時は橋の上をあるいていらつしやるものでする。」



なにもかにも一しよくたにして、眼を白黒させながら掻込みましたから、見てゐる人たちは、「なるほど馬鹿だ。」と笑ひました。

そこへお嫁さんが戻つて來て、それを見ると極りが悪くて、眞赤になつてしまひました。そして三太郎をつれて急いで歸つて行きました。「もう、貴方はよその家へいらつしやつてはいけませんよ。」お嫁さんは三太郎にさう申しました。

二

ある日、三太郎が外へ出ますと、前



お嫁さんは世方がありませんので、内密で自分のお父様の着物をきせました。そして又申しました。「これから御馳走が出ますが、私は貴方の足の指へ糸を結んでおきますからそれを私が引つばつたらお箸を取り、又引つ張つたら御飯を食べ初めなさいましよ。」三太郎はすつかり吞込みましてお座敷へすわりました。いよ、御馳走が出ますと、お嫁さんはうしろの室でそつと糸をひきました。三太郎はお箸をとりまし。又お嫁さんが糸をひきましたから、そろそろたべ初めました。招かれて來てゐた人たちは、それをみて、「三太郎さんは馬鹿だといふ話だが、仲々どうして馬鹿どころではない。」と感心してゐました。お嫁さんは「安心だと思ひましたので、一寸便所へまゐりました。その

の家の屋根の上で烏が喧嘩をして居りましたので、そばにおちてゐる石を拾つていきなり打つてました。

ところが石は烏にあらず、かへつて屋根瓦を壊したので大變おこられました。家へ歸つてお嫁さんにその話をしましたら、

「さういふ時は棒で追ふものですよ。」



と教へてくれましたので、三太郎は成程と思ひました。

その次の日、又三太郎が外へ行くとき、牛が喧嘩をしてゐましたから、早速棒を棒つていつて叩きましたら、牛はま

て或る日、お金をもつて町のがへ出かけました。途中頃まで來ました時、蟹を澤山もつてゐる男に出會ひました。

三太郎はそれを見ると、一つ蟹を賣つて、ようとおもつて、その蟹をみんな賣つてもらひました。そしてそれをもつて急いで歸つて來ました。その日は大そうよく晴れた日で道に茂つてゐる草も緑色の毛氈をひいたやうで、小川の水はチヨロ／＼と可愛い、聲で歌をうたつてゐました。

三太郎は少しくたびれたので草の上に腰を下して休みました。その内あまりいい、心持なので、ウト／＼してゐるうちにとうとう寢てしまひました。

三太郎が寢てしまふと自然にひざから籠がすべり落ちてしまつたので、中にゐた蟹はみんなそばの小川に逃げ込んでしまひました。そんなことゝはしらず、三太郎は夕方までねてゐましたが、なんとなく冷たい風が顔にあたる

すますあばれ出しました三太郎は驚いて逃げて來ました。そしてお嫁さんにその話をしましたら、

「貴方さういふ時は水をかけるものですよ」と教へてくれました。

三太郎は成程と思ひました。

その次の日も又外へ出かけましたら何となく騒がしいので、行つてみますと、人が喧嘩をしてゐる

のでした。三太郎は急いで水を汲んで來て、イキナリ二人にぶつかかけました。

サア二人の怒るまいことか、喧嘩をよして三太郎に向つて來ました。そ

して三太郎は、さん／＼に打たれてこぶだらけになり、命から／＼逃げて來ました。

家では三太郎の歸りの遅いのを、みんなしてが怒してゐるとこへ、魔だら

なので、驚いて目をさますと、もう日は西に沈んで西の空は眞赤に夕焼けしてゐました。これは大へんだとおもつて、いそいで籠を拾つて家へ歸りました。家へ歸つて今日蟹を買つたと話しました。そして籠を明けてみたら一匹もゐません。三太郎はおどろいて、そこら中さがしまはりしました。

お嫁さんは申しました。
「貴方途中で何かなさりはしませんか。」

「いや、唯一寸居眠りをしただけ。」
「それがいけません。どこですか。」
小川のそばですつて？だから、その時皆逃げてしまつたんです。もうお氣をつけなければだめですよ。そしてそんな小さなものは、およしなさいまし。」

その次の日、三太郎は又お金をもつて町の方へ行きました。途中に池のそばへ來ましたら、澤山水鳥が下りてあ

けになつて歸つて來たので、大そうおどろきました。そしてお嫁さんは聞きました。

「まあ！ どうなさいましたの！」

「今人が喧嘩してゐたから、私しやこの前おまへにきいたことがあつたから早速水をかけたなら、二人共大へんおこつてしまつて、これこの通りだよ。一たい、かういふ時はどうするものだらう。」

お嫁さんは吹き出したくなるのをこらへて申しました。

「もう／＼決して、貴方は何かに手しをしてはいけません。もうなるだけ外へ出ないやうになさる方がようございます。」

そして癪の手當をしてやりました。

三

其後三太郎は何か商賣でもしたらいいだらうと、両親やお嫁さんに進められて、靴かする氣になりました。そし

そんでゐました。

あまりきれいですから、あれを賣つたらきつと賣れるだらうと思ひました。そして近所で働いてゐた百姓に、

「あの烏を私に賣つて下さいませんか。」ときゝました。

百姓はそれをきくと、この人は馬鹿だナと思ひましたので、

「エ、賣つて上げてもよろしいが、その烏は大そう私になれてゐますから私の姿のみえるうちは貴方につかまりません。私があるなくなつたらおつかまへなさい。」と申しました。

三太郎は大そうよろこんで百姓に澤山のお金をやり、百姓が向ふへ行つてしまふまでまつてゐました。

百姓のすがたがみえなくなつた時、三太郎は大よろこびで、そろ／＼つかまへに行きましたら、烏はみんな一しよに、パツ！と飛んでいつてしまひました。(へばり)

辨慶と義経

窪田空穂



翌晩は、京都の人々が、清水の観音堂へお籠りをする夜でした。

「昨夜の男が、清水にゐるだらう。」

行つて見よう。」

辨慶はさう思つて出懸けました。清水へ行つて、門のところに立つて待つてゐましたが、待つ男は見えませんでした。

「今夜は歸らう。」

夜も更けたので、辨慶はあきらめて、歸らうとしますと、

清水坂の方から笛の音が聞えて來ました。

「昨夜と同じ笛の音だ。あ、笛を待つてゐたのだ。何うぞあの男の持つてゐる刀をお授け下さいまし。」辨慶は観音に願を懸けて、又門のところへ來て待つてゐました。

義経は坂を上つて、門のところを見ますと、昨日の僧がゐりました。今日は昨日とはちがつて、腹巻(鎧)を着て、薙刀を杖についてゐるのでした。

「賢な奴、今夜もここにゐる。」と思つて、真直に上つて行き

義経は心の中で思ひました。

「彼奴は感心な奴だ。これが歸り途だと、持つてゐる薙刀を落して、軽い手傷をつけて、生捕にして、家來にしてやるものを。」

辨慶は、相手にそんな考(かんが)へがあらうとは知りませんが、何うかして刀を奪つてやりたいと思つて、義経の跡をつけて御堂の方へ行きました。

辨慶は、若い男の跡については行きましたが、御堂の前は一ぱいに人がゐるので見失つてしまひました。

御堂の内を覗いて見ると、そこにも人が一ぱいに籠つてゐて、それぞれがつた聲でお經を讀んでゐましたが、その中に、法華經の一の卷の初めの方を讀んでゐる聲だけが際立つて聞く聞えました。

「不思議なことだ。あの聲は、あの若い男の聲にそっくりだ。とにかく内へ入つて見よう。」と思つて、辨慶は薙刀を高い所へ上げておいて、御堂の内の大勢のゐるところを、御堂の役人です、通して下さい。」といつて、押し分けて

ました。

辨慶は聲を懸けました。

「そこへ入らつしやるは、昨夜、天神でお目に懸つた方です。」

「そんな事もあつたかな。」

「持つていらつしやる刀を下さいませんか。」

「何度いつても同じ事だ。ただはやらない、欲しければ寄つて來て取れ。」

「同じ事ばかりいつてゐる。」

辨慶はさういつて、薙刀を振りまはして、坂の上から駆け下りながら切つて懸りました。

義経も刀を抜いて向つて、辨慶の打つて懸る薙刀を受け流してしまひました。

その手並に辨慶は呆れて、とても敵はない人だといふ氣がしました。

「夜中相手をしてもいいが、観音に願ひがあるから。」

義経はさういつて呆れて立つてゐる辨慶をそこに置いて、御堂の方へ行つてしまひました。

通つて、似た聲のする人の後ろに行つて立ちはだかつてるました。

義經はそれに気がついて、

「何うしてここにいる事が分つたのだらう。」と、思ひました。

辨慶には、何處にその男があるか分りませんでした。それは、この時には義經は、女の着る着物を頭から被つてゐたからです。

辨慶は困つてゐましたが、この女が變だと思つたので、差してゐた刀の端で、女の脇腹を小突いて、

「稚兒の女房ですか。私もお籠りをする者です。そつちへ寄つて下さい。」といひました。

しかし相手は返事をしませんでした。

「これは當り前の女房ではない、察した通りあの若い男だつた。」と思つて、今度は強く、もう一度刀の端で脇腹を突きました。

すると義經は、

「處な奴だ。貴様のやうな刀が主は、土の上でお籠りをする

しろ。大勢の人のゐるところへ来るなどは生意氣だ。あつちへ行け。」と、叱りました。

「意地の悪いことをおつしやる。昨夜からお目に懸つて、お馴染になつてゐるではありませんか。お側へ参りませう。」といつて、義經の側へ坐りました。

そして義經の讀んでゐたお經を手にとつて、

「立派なお經です。これは貴方のですか、人のですか。」と聞きました。

義經は返事をしませんでした。

すると辨慶は、

「あなたもお讀みなさい。私も讀みませう。」と云つて、聲を合せて讀み出しました。

辨慶は、比叡山の西塔にゐた頃は、評判な經を讀むことの上手な人でした。義經も鞍馬山に稚兒でゐて、經を讀むことは習つてゐます。その二人が聲を合せて讀むのですから、その邊にゐる者に較べると、際立つて上手に尊く聞えました。御堂に籠つてゐた人たちは、その聲に感心して聞き出したので、いつか御堂の内にしんとして來ました。

鈴を鳴らしてゐる者も鳴らすのを止めて聞きました。

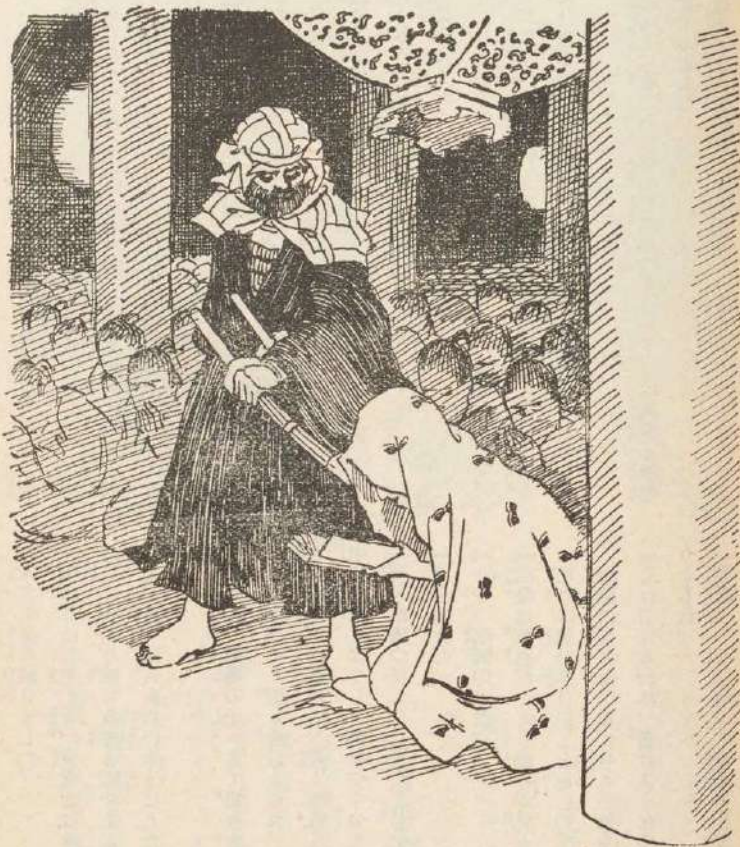
しんとした中で、二人で讀みつづけてゐる法華經は、一の卷を終つて、二の卷の半分どころまでも進みました。

經を讀むのを止めた義經は、

「尋ねる人があるから、又逢はう。」といつて起ちました。

辨慶は、

「目の前に入らつしやる時でさへ叶はないものを何時を目當てにして待つてゐませう。此方へ入ら



つしやい。」といつて義經の手を取つて、外へ出る戸口の所まで行ききました。

「お持ちになつてゐる刀を、何うあつても欲しいのです。何うぞ下さいまし。」

「此れは家に代々傳はつて来た寶だから、やるわけには行かない。」

「それならば、勝負をして、勝つた上でいただきませう。」

「よからう。」

辨慶は刀を抜きました。義經も抜き合せて、切り合ひを始めました。

御堂にゐた人たちは、驚いてしまひました。

「何うしたといふのです、お坊さん、こんな狭いところで、おまけに若い方を相手にして、何を冗談をするのです。刀をおしまひなさい。」といひましたが、辨慶は止めようともしませんでした。

義經は上に着てゐた女の着物を脱ぐと、下には直垂と腹巻とを着てゐました。



二人たちは又驚きました。

御堂にゐた尼、女、童などはみんな慌ててしまつて、縁から下に轉がり落ちる者もありました。又、御堂の戸を閉めきつて、内へは入れないやうにしたりして、その邊は大騒ぎでした。

二人は、舞臺の上へ出て切り合ひました。進みつ、退きつして、はげしく切り合ひました。

初めの中は恐れて、近くへ寄りなかつた大勢の者も、その中に面白くなつて、環をつくつて見物してゐます。

「何方が勝つだらう。稚児の方だらうか、法師の方だらうか。」

「稚児の方だ。」

「いや、法師の方だ。」

「法師は駄目だ。もう弱りが見えて來た。」

見物は思ひ思ひのことをいつてゐました。辨慶は切り合ひながらもそれを聞いて、

「それではおれは、負けさうなのかな。」と思つて、心細くなりました。

辨慶も一心になる、義經も一心になりました。その中に辨慶は少ししくじりました。義經はそこへつけ

込んで、走りかかつて切りますと、辨慶の左の脇の下へ切りつけました。切られて辨慶が弱ると、義經は今度は刀の背の方で、續けざまに打ちました。そして倒れたところへ、

馬乗りに乗つて、押へつけてしまひました。

「従ふか何うだ。」

義經に上からさういはれると、辨慶は、

「かうなるのが因縁でせう。従ひます。」と云ひました。

義經は、辨慶の刀を取り上げてしまひ、腹巻を脱がせてしまひました。

そしてそれを自分で持つて、辨慶を先へ立てて歩かせて、その晩の中に山科の隠れ家へ來ました。

辨慶の疵がなほると、義經は供に連れて京都へ來、平家の様子を窺つてゐました。

◆童謡(一部) 野口雨情選

燕と雀

神戸市 笠間まさ路

雨は しよほ しよほ
濡れ燕

飛んでる。

雨は しよほ しよほ

ゆふ雀

庇のかけから

雨見てる。

港

東京市 吉川こういち

港に浮いてる

赤い浮標

迷子のかめめは
かへれたか。

藪蚊

和歌山 西 丈一

ラムプが小聲で

唄つてる

藪蚊が三匹

とんで来て

笠に並んで

聞いてゐる。

カナノ、蟬

千葉縣 染谷 秋月

カナノ、蟬が

鳴き出した

今日も一日

暮れちやつた。

草

新潟縣 賤機多味男

不思議でならない



蠅のしんじり(推薦)

江口雄一郎

或る日の夕方、臺所の隅で一匹の蚊がシクシク泣いて居ました。丁度そこを通りかゝつた蠅が大へん氣の毒に思つて、

「もし、貴方はなんでそんなに泣いていらつしやるのです。もしかあの大事な針でも落したのぢやなくつて。」と、さも親切さうに申しました。蚊は大へんに喜んで、

「いゝえ、さうぢやないのです。實は私のお母さんが昨日の夕方、あの蜘蛛の網にかゝつて死んちやつたのです。」と、外を眺め乍ら訴へる様に申しました。蠅はそれを聞くと急に悲しくなつて、両方の手で涙を拭き、

「さうでしたか。實は私の娘もこの間あの網にかゝつて死んでしまひました。丁度今日はその娘の命日でございますよ。」と言ひましたが、やがて大きな目をギロギロと動かしながら、

「どうでせう、あの蜘蛛を殺してしまつては、さうすれば貴方のお母さんや私の娘の仇が討てて、こんなに嬉しい事はありませんよ。」と蠅は熱心に申しました。蚊はすつかりよろこんで、

「どうか仇を取つて下さい。お願いでございます。で、それにはどうしたらよいでせうね。」と雀躍りして尋ねました。すると、蠅は一寸小首をかしけましたが、

「それは造作はありません。かういふ風にして……」と言つて、蚊の耳に口を當て、何事かさ、やきました。

丁度その時、小窓の方を見上げると、糸を食つた蜘蛛が急いで通つてゆくのが見えました。二人はあわて、隅の方にかくれました。

蜘蛛はいつもの仕事場に来ると、すぐ肩から糸をおろして、

「今夕も一つ網を張つて、可愛い、坊ちゃんや、お嬢さんの生血を吸ふ蚊の奴を退治てやらう。」と獨り言を言ひ乍ら、古い糸を新しい糸と張り替へました。そこへさつきの蠅がニコノノし乍ら入つて來ました。そして一生懸命に網を張つてゐる蜘蛛を見上げながら、

「もし、蜘蛛さん。實は今夕せひ私どもが貴方を呼んで、御馳走しようと思ひますが、仕事がすんだらすぐ來て下さいませんか。私の家はすぐお隣なんですから。」と、さも親しさに申しました。蜘蛛は變な事を言ふ奴だなどと思ひました。が、仕方なく、

「では折角ですから参りませう。」といつて、又前のやゝに網を張り出しました。

屋根の草
どうして登つた
不思議だ、不思議だ
屋根の草。

小狐

盛岡市 菊池 二郎

こんく小狐
赤狐
お山のお藪の
赤狐
こんく今夜は、
さやうなら。

鐘

尼崎市 福島 二郎

鐘がなる
山の向ふで鐘がなる
一つなつたら
日が暮れた

一つなつたら
星が出た
三つなつたら
月が出た。

朝

仙臺市 西街 赫 四

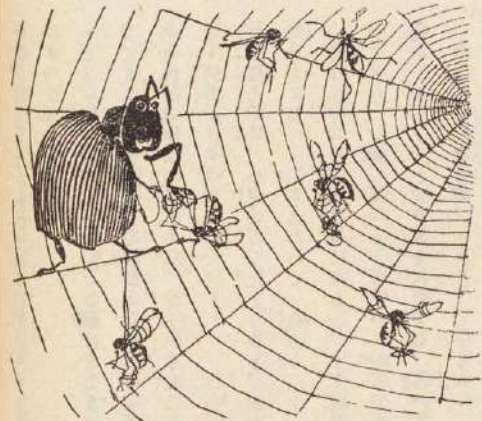
雨ふりあがりの
雀の子
びちやびちや
あるいて
さわいでる

兎の後足

東京市 長谷川 徳次

兎があとあし
きつたとさ
あんまり長くて
きつたとさ
それでも龜より
長いとさ。

蠅は心の中でうまく行つたなと思つて、轉ぶやうにして蚊のところへ来ました。
「蜘蛛の奴が、まく欺されたよ。さあ、早く準備に取り掛つて呉れ。」と、そこ
に居た手下の蠅や蚊を指圖して、お料理を造るやら、机を並べるやら大へん忙し
うございました。



いよく準備がすつかりと、のつてしまふと、蠅はそこに居た手下の蠅や、蚊
に命じて、向の方で網を張つてゐる蜘蛛の様子を見にやりました。あとにはさつ
きの蚊と蠅と二匹きりになりました。

「どうだい。このお酒をうんと飲ま
してお、てな……。」
やがて蠅はかう言つて、蚊の方を
見てカラ／＼と笑ひました。そして、
酒の壺を自分の方へ引き寄せると、
頭を差しのべて中をのぞきました。
中からは蠅の大好きなお酒の臭ひ
が、ブン／＼臭つて來るのでした。
もど／＼怒の深い蠅は、つい一ぱい
飲んで見ようと思ひました。一ぱい

飲むと何とも言へないよい心持ちがしました。もう一ぱい、もう一ぱいと、蠅は
たうとう仇討の事も忘れて、ガン／＼飲んでしまひました。そしてもう足がセヨ

ロヒヨロになつてしまひました。そばに居た蚊は大へんに心配して、
「誰れか來て呉れ。」と、小窓のところから手まねぎをしました。

「あれ、呼んでゐるぞ。蜘蛛を殺すのはこの時だ！」と、すつかりかん違へて
しまつて、一時にとつと押しよせて來ました。

途中に蜘蛛が目を光らせて待つてゐるとは知りませんでした。新しい網は目に
入りませんでした「あッ！」といふ叫び聲と一しよに、一匹も残らず網にからま

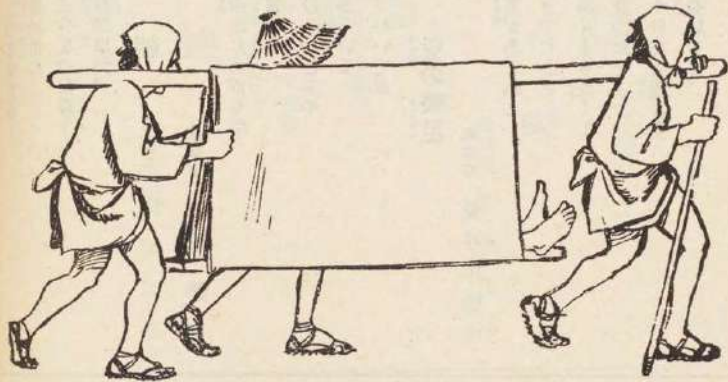
つて動けなくなつてしまひました。
小窓の處で手まねぎをしてゐた蚊はびつくりして、

「あれ／＼、蠅さん、大へんです、大へんです。早く起きて下さいよ。」と叫んで
蠅の身體を揺りますと、蠅は、

「何が大變だよ。」といつて蚊の首にすがつて起上らうとしましたが、そのはずみ
にヒョイと左の手をすべらしてよろ／＼と倒れかかりましたから堪りません。

「あッ！」といふ間に蚊と一緒に傍にあつた酒壺の中におつちてしまひました。
蠅と蚊が酒に溺れて苦しんでゐる頃は、蜘蛛は仲間ものを告んな集めて大宴

會を開いてゐました。(をばり)



武者修者行

藤野英次

山賊にあつてひどい目にあつた甚兵衛は、翌朝になつてやつと籠の旅宿へ着きました。そしてその日はぐつすり寢込んでしまひました。

夜になつてふと甚兵衛は目を覺しました。すると隣の部屋でがや／＼大聲で話が始つてゐました。何心なく聞いてゐますと、隣の部屋では今諸國の武者修者の者が寄つてめい／＼の武勇談をやつてゐるのでした。甚兵衛は思はず床の中から首を伸ばして、勇士の話や豪傑の話を聞いてゐるとだん／＼面白くなつて、ぢり／＼懐近くにじり寄つて行きました。すると何時の間にか甚兵衛は元氣になつて、愉快で愉快で耐らなくなりました。

何を考へたか甚兵衛はむくと起き上つて、早速身支度を調べて番頭を呼びました。そして少しばかり残つてゐた金で駄定をすますと、急いで旅屋を出立しました。

甚兵衛はその足で城下の町へ向ひました。城下へ着くと、まつそく一番家老の脚を尋ねました。そしてやつと懐しめて

ると町の辻關口に立つて、

「お頼み申す。お頼み申す。」

「どうれ」と答へて取次ぎが出て來ました。

甚兵衛は丁寧に御辭儀をして、

「ちと御話あつて御家老に御目見得いたしたい。左様御取次ぎ下されい——」と、鐵扇を斜に威儀を作つて申しました。

取次は怪しげに甚兵衛を看てゐましたが、

「貴方はどなた様で御座いますか？」と訊ねました。

すると甚兵衛はすまして、

「拙者は猪狩荒之介と申す武者修者の者で御座る。仔細は御家老に會つてお話ししたい。」と答へました。

それで取次ぎは奥へ入つて行きましたが聽て戻つて來て、

「では何卒此方へ。」と甚兵衛を案内して、奥座敷へ通しました。

甚兵衛はめつたに見たこともない廣い立派な部屋へ入つたので目ばかりきよ／＼させてゐましたが、でも威儀を作つて座蒲團の上いきらんと坐りました。暫くして一番家老が入つて來ました。すると甚兵衛は座を下つて、

三

三三

「これは御家老で御座るか。拙者は猪狩荒之介と申す者以後御見知り置き下されい。」と挨拶をする。

「拙者は山本但後と申す。して御貴殿は何用あつて參られたか？」と言つて家老はじろ／＼甚兵衛をみつめました。甚兵衛はす／＼、

「實は拙者お頼みがあつて參つたので御座るが、當御家中で牧狩を御催し下さる譯には行くまいか、ちとおたづね申すと、云ひました。

御家老はへんな顔をして甚兵衛のいふことを聞いてゐましたが、

「今のところ左様な考へは御座らぬ。が、どうして御貴殿は牧狩などお望で御座るか。」と訊ねました。

すると甚兵衛は膝を乗り出して、

「その儀で御座る。拙者は牧狩にてあつばれ手柄が二たいで御座る。實は拙者、某所に於いて思はぬ不覺をとり、返す返すも残念な次第、聞けば牧狩には猪が出るの事、その猪を討ちとつて、見事、汚名を雪きたい考へで御座る。」と勇しげに辯じました。

五三

御家老は甚兵衛をみて急に可笑さうに笑ひました。

「は、あ、それはまことに残念な次第、さりながら今すぐと
牧狩などは當家中では出来ませぬ。なんとか外によい思案は
御座らぬか。」と云つてふと思ひついたらしく、

「い、ことが御座るぞ! 隣國の脇坂殿の御家中で近日お催
しがあるとの事、さつそく移られては如何——」

と御家老がいふと、甚兵衛は喜んで、

「それは何日で御座る。」と訊ねました。

「さて、明日らしく御座る。」と御家老は答へました。

甚兵衛は明日ときいて急にあわて、

「これは有り難い事を御聞きいたしました。明日といへば程ない
こと、急いで参ると致さう。」と御辭儀もそこへ立ち上つ
て、御家老の邸を出て隣國を指して行くのでした。

四

その夜一晩歩きつづけて、あくる日の夕暮時にやつと甚兵
衛は隣國に着きました。そのときはもうへとへとに疲れて、
一歩も歩かぬが出来なくなりました。が勇氣を出して、

お家騒動を治めて悪侍を獲らうと切り獲すのだ。」と思ふとま
た元氣が出て、も一人の侍を捉へて、

「ちとお尋ねいたす。當家中の悪侍は何奴で御座る。」と訊
ねますと、侍はぶり／＼怒つて、

「何んだと、馬鹿なことを申すな。」とまた向ふへ行つてしま
ひました。甚兵衛は情なくなつてまた一人の侍を捉へ、

「お尋ねいたす。當家の仇、御家横する悪もの、頭をお告
げ下されい。」とせき込んで訊ねました。

「馬鹿者、不埒な奴だ。當家の侍には忠義者の外はないぞ。」
今度は大聲で嗚り出しました。

甚兵衛は愕いて、

「左様な筈はない。拙者は確に聞いて来たのだ。」

といひかけると、侍は眞赤になつて怒つて、

「無禮者!」とキラリ刀を抜いて、甚兵衛に切つてかゝりま
した。

甚兵衛はヒヤリとしましたが此處ぞ!と思つて自分も刀を
抜きました。

すると其處らにゐた侍たちが集つて、一齊に刀を抜いて

は何處か」と眺め渡しました。すると向ふの雜木林で颯波の
聲があがりました。みると確に牧狩らしい。

「あ、牧狩だ!」と甚兵衛は躍り上つて喜びました。

最早胸が鳴つてちつとして居れなくなり、すぐに袴のち、
だちをとり、褌を掛け、頭に鉢まきを締めて、大急ぎで雜木
林の方へ向ひました。

そこでは多数の侍たちががやがや入り亂れて、たいへん
混雜してゐました。甚兵衛は中の一人を捉へていきなり尋ね
ました。

「牧狩で御座るな。」

「左様。」

「拙者は武者修行の者で御座る。荒れ狂ふ猪ははまだ出ない
ので御座るか?」

牧狩の侍は怪しげに甚兵衛を眺めて、

「牧狩は只今終つたところで御座る。」といひ捨てると、さつ
さと向ふへ行つてしまひました。

甚兵衛は急に落膽して茫然侍の後姿を見送りました。

「あ、是非もない。だがまだ一つ發つてゐるぞ。この大名の
甚兵衛をとり囲みました。

甚兵衛はもう如何することも出来ないのがたく／＼顔へ出
しました。バタリと誰かに倒されたかと思ふと、大勢の侍た
ちは寄つてたかつてふんだりけつたり、甚兵衛をひどい目に



會はせました。甚兵衛はいまにも死にさうで、
 「お助け——」と云つたかと思ふとおい／＼泣き出しました
 とり圍んでゐる侍。たちはおつけにとられて、皆な甚兵衛を
 眺めました。とにかく侍。たちは甚兵衛を繩で縛つて、殿様
 の前へ連れることにして雜木林の奥の番屋の内へ引つ立てま
 した。

甚兵衛は泣く泣く殿様の前へ出ますと、殿様は一段高い所
 から、

「其方は何奴だ。」とお訊ねになりました。

すると甚兵衛は蚊のやうな聲で、

「猪狩荒之介……。」と申しました。

「何、猪狩。」

「いえ、本當は甚兵衛で御座る。」といつて平伏してしまひま
 した。

殿様はすぐこ。

「これは、儒の武者だ。」と思はれて、密つとおそばの侍たち
 にお告げになると、侍。たちはどつと腹をかへて笑ひました
 殿様もお笑ひになつて、

「どうぢや、武者修行はつらいぢやらう。これに惚たら家へ
 歸るがいいぞ。」と仰つて可哀想な甚兵衛をお赦しなさいま
 した。

でも甚兵衛は平伏したまゝ、起き上らないので、殿様は、

「こりや甚兵衛、どうしたのぢや。」とおたづねになりました。

「はい。」と甚兵衛はお答へしましたが、先刻お侍。たちにひ
 どい目に會つたので足も腰も立ちません。殿様は不慥に思は
 れて、さつそく甚兵衛の村へ使を立て、息子の七助をお呼び
 寄せになりました。

「戸板を一枚持つて来い！」といふ使の言葉を聞いた七助は
 どうした事かと思ひましたが、とにかく下男と二人連れで急
 いで殿様の處へ参りました。そして七助は殿様の前でへとへ
 とになつてゐる甚兵衛を見ると魂消てしまひました。けれど
 泣く泣く下男と二人で甚兵衛を戸板に乗せて自分の村を指し
 て歸りました。

甚兵衛はもう閉口してほんやり戸板の上で小さくなつてゐ
 ました。(をほり)

日 暮 (幼年時)

香川縣木田郡水田校春五

佐々木綾子

西の空が

眞赤になつた

はぎの花が一つ

おちた

赤ん坊が

なき出した



水たまり (幼年時)

高知縣中村小學校春五

永橋大介

かへるがとびこむ

水たまり

草がういてる

水たまり





悪い王様と禍の話

宮島資夫

賓頭盧は王様から、

「禍」といふものを連れて来い、それを連れて来たら、お前の父の首を渡してやる」と云はれて、泣く／＼お城を出て来ましたが、けれども、禍と云ふものが、身なのか體なのか、また

いやうな苦しい境遇になつてしまつたので、誰一人として王様を恨まない者はなくなりました。この様子を見兼ねて、賢い家來が時々王様を諫めますと、

「え、生意氣な事を云ふな」と云つて、すぐに手討にあつてしまふのです。だから賢い人達は一人去り二人去りして、王様のそばには、いつでも王様の鼻息ばかり窺つて、自分達も面白く思ひや得な事さへすれば好いといふやうな、いやな奴ばかり残つたのです。この有様を見て、賓頭盧のお父さんの顔羅隨はかね／＼心に嘆いてをりましたが、或る日思ひ切つて王様の前に進み出で、

「王様、あなたが人民の事を少しも考へないで、こんな事を續けておいでになると、今に必ず禍といふものが参ります。一粒の米を作るのにでも、百姓はどんなに苦心してゐるか判らない事を、少しはお考へにならなければいけません」と云ひました。すると

「ふうん、かうしてゐれば禍といふものが来るといふのか。一體その禍といふのはどんなものか。お前がそれほど知つてゐるなら、すぐに私の眼の前につれて来い」と負け嫌ひな

どんな處にゐるものなのか、賓頭盧にはかいくれ判らないのでありました。氣丈といつても今年十四になつたばかりの賓頭盧は、思ひがけなく起つた父の死の事や、また、何物とも判らない禍と云ふもの、行方をこれから尋ねなければならぬ事を考へると、胸が一杯になつて来て、途方に暮れて、夕暮の町をしく／＼泣きながら歩いてゐるのです。

賓頭盧のお父さんは、印度の私良摩國といふところの、達婆王の老臣で顔羅隨大臣と云ふ人だつたのです。所がこの達婆と云ふ王様は、それは／＼残忍な人で、民百姓を苦しめては重い年貢を取り、自分ばかり綺羅を飾り、飽き／＼するほどおいしい物を喰べたり、酒を飲んだりして、いつも綺麗な侍女達を澤山連れて歩いてゐるのです。

そんな事が長年續いたものですから、百姓や商人達は生血を吸はれた人のやうに瘦せてしまひ、遂には他所の國へ逃げ出して行く者が多くなつたので、達婆王は今度は他國へ逃げようとした者は、目つけ次第八裂にするといふ布令を出しました。それだからその國の人達は、他所へ逃げる事も出来なければ、そこにはれば皆殺や／＼と絶死しなければならぬ。

王様は、わざとそんな難題を云ひかけました。「い、え王様、禍といふものは、そんな眼に見えるものではないです。けれども一度それが参りますと、國は亂れ、民は怒り、遂にはあなたまでも亡びておしまひになるやうな事が出来る、それは／＼恐ろしいものでございます」と顔羅隨が尙もいひました。「なに、亡びるなぞと不吉な事をいふか。眼にも見えないものゝために、亡びるなぞと云ふ事があるか。さあ亡びると云つた以上、その禍を連れて来い」と王様は一層難題をいひ募りました。

「あなたがどんなに仰しやつても、眼に見えないものは連れて参れません。けれども、かうしてお出でになれば必ず禍が来て、あなたも亡びておしまひになります」と顔羅隨はきつと云ひ切りました。

「え、眼にも見えないものがどうして私を亡ぼす事が出来る。お前こそそんな事をいつて、私の身を呪ふ不忠な奴だ。一旦そんな事をいひ出した以上、連れて来なければ手討にするが、どうだ」と達婆は平素から目の上の瘤のやうな氣がし

てゐたこの顔羅隨を、かう云ふ機會に殺してしまはうと考へ
ながら、云ひ券るのでしたが、

「何と仰せられても連れて来るわけには参りません。けれど
もやがて必ず参ります」と顔羅隨も強情にいひ張りました。
すると達婆は、

「うむ、飽くまで汝は主人を罵るか」と云ふなり刀を抜いて、
顔羅隨の首を切り落してしまひました。さうして顔羅隨の家
にはその首のない胴體だけを送り届けて、

「顔羅隨は今日王様に、禍といふものが来るなどと云ふ儂り
を申し立て、王様のお氣に逆らつた爲めに、遂にお手討と
なつたのだ」と家の者に云ひ聞かせました。顔羅隨の家には、
年老いた顔羅隨の妻と、賓頭盧との二人の外には召使ひが
るばかりでしたが、賓頭盧はそれを聞くと、

「え、あの残忍無慈悲の達婆王め、遂に父親まで殺したのか。
この上は彼奴を殺して自分も死んだら、國中の人は、んなに
喜ぶ事が判らない」と平素から達婆の無道な事を聞いてゐた
賓頭盧は、血相を變へて立上るのを御母さんが見付けまし



とほとお城を出て来た處で
した。

賓頭盧は城を出ても、何
處へ行くといふあてもなく
歩いてゐますと、もう秋の
日は暮れかゝつて、町はだ
ん／＼と寂しくなつて來ま
した。賓頭盧は堪らなく悲
しくなつて來て、力なく歩
いて行きますと、ふと薄暗
の町の中で五六人の子供が
環を作つて、遊びながら歌
ふ聲が耳に入りました。そ

れは、
幸ひ見たけりや善をしろ
わざはひ見たけりや悪を
しろ、
善と悪とはうらおもて

「これ賓頭盧、お前はそんな顔をしてどこへ行くのす」と
訊ねました。賓頭盧も母のこの聲を聞くとほつとして、

「いえ、私はこれから王様のところへ行つて、お父さんの首を
頂いて來て、お罪ひをしたいと思ふのです」と親孝行な彼は
母に心配をかけまいと思つてさう答へてしまひました。

「あゝそれなら宜いが、決して馬鹿な事をするのではありま
せん。あとには私とお前と二人きり、殊にどんな理由があつ
ても、王様に刃向へば不忠の名は免れない。よく氣をつけて
早く行つてお出でなさい」とお母さんにいはれてしまひまし
た。それで賓頭盧は仕方なく、王様の前に出て、

「どうぞ父の首を私に下さいまし」と口惜さを堪へて頼みま
した。すると、

「お前の父は私に、禍と云ふものが來るといつて嘘をついた
から殺してしまつたのだ。だから若しお前が父に代つてその
禍といふものを連れて來たら、いつでも父の首を渡してや
る」と達婆に云はれました。賓頭盧は、自分も、禍といふも
のを知らないが、それを連れて來なければ父の首が貰へない
なら、因果の報までも堪へに行かうといふ氣になつて、と

善は門から出ないけど
悪は千里の山も越す。

やれこれ悪は山の奥
や一まの奥に行つて見ろ

禍さんがねてゐます。
さあさ皆で踊りましょ、
禍さんが來ぬ中に。

と歌ひ下ら交る替るに手を叩いては踊つてゐるのでした。
賓頭盧は子供の踊るまはりに立つて、ちつとその歌に聞き
入つてゐましたが、山の奥に行つて見ろ、禍さんがねてゐま
す、と云ふ文句を聞くと、ふと彼の心に、ひよつとしたら禍
と云ふものは、山の奥に住んでゐるのではないかといふ考へ
が思ひ浮びました。

「禍といふものが何處に住んでゐるのが自分にはちつとも
判らないのだ。けれどもそれを探し出して達婆王の處へ連れ
て行かなければお父さんの首は貰へないし、その首の貰へな
い中は、お母さんの處へ歸ることも出來はしない。さうして
それを探しに行かうとするときに、この小さな子たちが、禍

は山の中にゐると歌つてゐる。だからこれはひよつとしたり、山の中に禍がねてゐるのかも判らないのだ。どこと云つて決まつて探すあてもない自分だ。それではこれから、山の中を探して見よう。と自分で問ひ自分で答へて、もう薄暗くなつた道を、遠く見える山の方を目掛けて歩いて行きました。けれどもその山はずつと遠くの方にあるものですから、歩いてゐる中に日が暮れて、四邊は眞暗になつてしまひました。賓頭盧はそれでも構はずどん／＼進んで行きました。やがて疲れ切つてしまふと、道端の木の下に倒れて、前後も知らず寢入つてしまひました。

二

翌朝賓頭盧が眼を覺ました時には、秋の空が美しく晴れてゐました。賓頭盧はふと氣がつくと、自分は道端の木の下に眠つてゐて、夜露の爲めに衣物も何もしつとりと濡れてゐます。それでもよく、毒蛇や猛獸に食はれてしまはなかつたものだ、心の中で喜びながら立ち上ると、昨日の夕方見た時には、誰か遠くに驚かしてゐた山が、もう影の影の巖に忽然



と立つてゐるのでした。昨夜暗くなつてからこんな澤山進んで来たものかと思ふと、俄かに元氣が出て来て起きるとすぐに歩き出しました。

お腹がすくと、道端に落ちてゐる木の實を拾つては喰べながら、進んで行きますと、やがてその山の麓に達しました。賓頭盧は知りませんが、この山は、摩訶陀國といふ國で有名な、靈鷲山といふ靈山でありましたが、麓から頂上までは、自然と十二段に刻まれてゐて、それが皆な切り立つたやうな峻険な岩ばかりですから、登るにもなかく／＼骨が折れるので、人の足跡もないやうな峻険山でした。

然し賓頭盧は、この山と一旦思ひつめて来たことですから、禍を探し出さない中は、死んでも歸るまいと心にきめて、木の根に取りつき、葛を力にして、懸命に登りはじめました。岩の根で足をすべらし、腐れた蔓を切らしては心も消えさうに驚きながら、漸くに登つて、頂上の平地に達した時にはもう日もすつかりと暮れ果て、高山の冷氣が、氷のやうに冷たくしみ／＼と肌にしみ込んで来るばかりでした。

氣のないこの山の頂では、流石の賓頭盧も進む事も退く事も出来ないで、再び途方に暮れると、また今までひそんでゐた悲しさがこみ上げて来て、思はず聲を放つて泣きました。

が丁度その時、向ふの方の岩陰から、何か火焔のやうなものが、ちらつと射したので、賓頭盧は急に蘇つたやうな氣になりまして、火の光を目がけて驅け出して行きました。

すると大きな岩の蔭に、白い髯を生やした一人の仙人が心持よささうに居睡りをしてゐまして、その傍には世にも恐ろしげな獸がうづくまつてゐるのでありますが、賓頭盧の眼に火のやうに映つたのは、その獸の口から吐く火炎なのであります。

賓頭盧はもしかこれが、自分が尋ねてゐる禍といふものではないかと思ふと、こはさも何も忘れて、仙人の傍によつて、

「もし／＼」と云つて拾り起しました。仙人はふと眼を覺して、賓頭盧の顔を見ると、「私を起したのはお前か。何の用があつてこんな夜中に、山の上へやつて来たのだ」と不思議さうに訊ねました。

「はい、私は私良摩國の賓頭盧といふものなのですが、玉座のひつつけでこの山奥へ、禍といふものを採りに来たのです」と賓頭盧は答へましてから、自分のお父さんが達婆王に切られたことから、その首を貰ふために、禍を採りに来たのだといふことを細かに語りました。

「あゝさうか、實は私はお前がこゝへ来るだらうと思つて、先刻から待つてゐたのだ」といつて仙人は笑ひながら、「私はこの山奥に住んでゐても、下界にどんなことが起つたかといふ事をちやんと知つてゐる。お前のお父さんが達婆王を謀めて殺された事から、お前が達婆王を殺さうとして、お母さんに叱られた事までちやんと知つてゐる。それから、あの私良摩國の城下の町で子供になつて禍さんは山にゐると歌を歌つて聞かせたのも私のした事だ。さうしてお前をこゝへ引き寄せたのは、その禍といふものをお前に渡してやりたい爲めだ。さあ、お前の尋ねてゐる禍といふものは、こゝにゐるから、これを連れて歸るが好い」と、傍に寝てゐる猪のやうな歌を指して見せました。

「これ賓頭盧、お前は決してそんな事を心配しなくても好い。いま私がやるこの歌を連れて行けば、お前は今夜の中に自分の家へ歸る事が出来るから」といつて、傍に寝てゐた歌を結へた繩をとつて引き立てました。そして、

「さあよく見るが好い。これが禍といふ獸なのだ。この獸は、形は猪によく似てゐるが、食物は鐵より外の物は何にも喰べない。鐵を深山喰べさせて飼つておけば、犬猫よりも溫和くつて、飼ひ主にもよくなつむけれど、もし鐵をやらなくなつてしまつたら、獅子や虎よりもつと烈しい勢ひで怒り出して、とても押へる事は出来なくなる。お前にこの獸をやるから、これを連れて早く歸るが好い、さうして達婆王からお父さんの首を貰つて大切にとひ用ひをしてしまつたら、すぐにあの國を立ち退かなければならない事を忘れてはなりませんぞ。あゝいふ風に、人と獸の境も判らないほど亂れ果てた國には、一時も長く居てはいけなから」と云ひ聞かせて、仙人は獸を結へた繩を賓頭盧に渡しました。

賓頭盧は嬉しさと恐さと交つた妙な氣持で、おつ／＼繩を受け取りましたが、禍はもう賓頭盧に馴れ切つたものゝ

んだ禍を貰へる事の嬉しさに、躍り上らなばかりに喜ひまして、仙人の前に手をついてお辭儀をして、

「どうも仙人さま有難うございます。あなたのお庇でこの禍を連れて行けば、お父さんの首を貰ふ事が出来るのです」といつて、また幾度か頭を下げて、

「さうしてあなたは何といふ力なのですが、またこゝは何といふ處ですか、歸つてお母さんにお話しをしなければなりませんから、どうぞ教へて下さいまし」と頼みました。仙人はこゝ／＼笑ひながら、

「私の名前が、私の名は假に正智利仙といふのだ。天の上の管窓星といふ星が私の本身だ。それからこの山は摩迦陀國の靈鷲山といふ山で、私はいつもこゝにゐるのではないが、お前に禍をやりたければかりに、今夜はこゝへ來てゐたのだ」といつて聞かせました。

賓頭盧は、自分がどうしてそんなに速い摩迦陀國の靈鷲山へ來られたのかを驚ろくと共に、歸り途の遠いのを思つて當惑したやうな顔をしました。すると仙人はすぐにそれを見

やうに、溫和しく繩に引かれて傍に近寄つて來るのでした。

「さあ早く行きなさい」と仙人がいひますので、賓頭盧は、「どうも仙人さま、まことに有難うございました」と幾度も幾度も丁寧な禮をして、禍の繩を取つて暗い道を恐る／＼歩き出しました。

所が不思議な事には、禍が口から吐く火炎のために、暗い道も照されて明るくなり、峻峭な山路も平地を行くやうに難なく下り切つてしまひまして、なほその夜の中に、私良摩國の自分の家まで歸つて來てしまひました。

賓頭盧は家へ歸ると、禍を庭に繋いでおきまして、お母さんに、昨日お城へ行つて玉座から禍を連れて來いといはれた事から、夕方城下の町を歩いてゐる中に子供の歌を聞いて山へ行く氣になつたこと、仙人に逢つて禍を貰つて來たことなどこま／＼と話しました。お母さんは、禍といふ口から火を吐く獸の話を聞いた時には、大層恐ろしさうな顔をなさいましたが、それでも明日その歌を連れて行けばお父さんの首が頂けるといふので、大變安心なさいまして、その晩は賓頭盧もお母さんのそばに寝て、昨日からの疲れを休めまし

た。

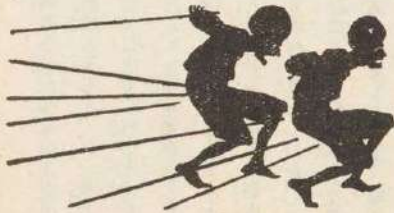
翌日になると、賓頭盧は早くから起き出して、お城へ出て行く綺麗な着物に着換へて、禍を引いて出て行きました。町を通る人達は、小さな男の子が、見慣れない猪のやうな獸を引いて行くのを不思議さうに眺めてゐました。それでも禍は怒るやうな様子もなく、柔和しく賓頭盧のあとから、のそ／＼と歩いて歩いてゐるのです。

賓頭盧は達婆王の前に出まして、

「王様、只今歸つて参りました。あなたの仰せに従つて、禍といふ獸を漸く探してまゐりましたから、どうぞお父さんの首を下さいまし」と云ひますと、

「さうか、本當に連れて來たならお前は父の顔羅隨よりえらいものだ。どれ私にその獸を見せろ」と達婆王がいひましたので、賓頭盧は禍をお庭の方へ引き出して來ました。すると達婆王はそれを一目見るより、

「何だ賓頭盧、お前は禍だなどとえらさうな事をいふが、これはたゞの猪ではないか、そんなことでこの達婆王が欺せらると思ふか」と、すぐに鐵鞭を振らせて叱鳴りつけまし



「それではこれでお暇します」といつて我家に歸ると、仙人からいはれた事を母に話して、父の首を持つたま、母と二人ですぐに他國へ落ちのびてしまひました。

後になつて達婆王が、賓頭盧の眼の中の凄かつたことを思ひ出して、それとなく人を探らせにやつた時には、もうその家には誰も居りませんでした。

達婆王は禍といふ世にも希らしい獸を手に入れたのを喜んで、小舎を作つてその中に入れ、毎

た。

「いゝえ、さうではございません。これは本當の禍といふ獸です。嘘と思ふなら、どんな鐵でもいゝから喰べさせて御覽なさい。この獸は鐵よりほかの物は何にも喰べませんから」

と賓頭盧は怒る、所もなく答へましたので、達婆王は面白い事に思ひ、その朝も罪のない人を切り殺したばかりの血汐のついてゐる刀を禍の前につきつけました。すると禍は、その刃先から、さも旨さうにほり／＼と飴のやうに喰べてしまひました。

「成程」と達婆王は感心しまして、

「おう、これは必ず禍に違ひあるまい。お前は年端も行かないのに、よく感心に之れを連れて來た。約束の通り、お前の父の首を渡してやらう」

近侍の者にいひつけて、顔羅隨の首を取り寄せて、賓頭盧に渡しました。賓頭盧は變り果てた父の顔を見ると、無念と口惜しさに堪へかねて、思はずれつと泣きながら、王の顔をぢつと眺みつけ、

田鐵を興へて楽しんでゐましたが、賓頭盧が連れて來た時にはそれほどでもなかつたのですが、達婆王の所へ來てからの禍が、鐵を喰べることは、それは／＼驚くばかりです。初めの内は城の中に蓄へてあつた鐵を出して來て與へてゐましたが、やがてそれも喰ひ盡してしまつたので、こんどは國中に布令を出して、庶民に鐵を納めさせました。さうして成るべく少しづつやらうとするのですが、少し鐵が足りなくなると、禍は荒れ出して、誰れの手にも終へなくなつてしまふので、あとからあとからやるものですから、納めて來た鐵はちきになくなつて、禍は象のやうに大きくなつてしまひました。さうして食べる事もだん／＼烈しくなつて來るのです。

禍を養つてゐる掛りの役人もほと／＼困り抜いて、城の中にあつた古い太刀とか薙刀のやうなものまでやつてゐましたが、それでも足りなくなると、お城の中を暴れ廻るので、また更に庶民に布令を出しまして、その土地の金物屋は、日々百貫目の鐵を納め、ほかの商人は日に一貫目づつを納めろと云ひましたので、商人は有合せの脇差や鐵瓶のやうな物まで取り集めて、納めてゐる中に、その種もつきてしまつて、間

もなくもう納める事が出来なくなりました。また金物屋の者共も役所に出頭しまして、たゞ今まで納めた鐵は、此の土地の物が失くなつたので、外の土地から仕入れて納めて居りましたが、それももう種が盡きましたので、明日からは何と仰せられても納める事は出来ませんと申し出ました。

そこで役人達は手を分けて、商人の家から金物屋の取引先まですつかり調べて見ましたが、どこの家も言葉に違はず鐵氣のものといつては、釘一本すら失くなつてゐる有様です。外の土地を調べて見ても、全く鐵の種類切れになつた事が判つたので、流石非道の役人たちもこれにはどうする事も出来ず、達婆王の前に出て、

「王様に申上げますが、國內はいふに及ばず、隣國まで尋ねましたが、鐵類といふ鐵類はもう一片もなくなくなりましたから、明日よりは禍にやる餌がございません」と恐る／＼述べました。如何に心のねぢけた達婆王でも、眞實なものは仕方なく、之れには困り果てたやうにししばらく考へてゐましたが、やがて、

「ない物はやる罪には行くまいから、それで足るにが、ほかすから、自分のしたいと思ふ事のためになり、今までもどれ程の人を殺して来たのか判らないほどの人でありましたから、荒れ狂ふ禍を見ては、矢張、この獸も自分のやうに人間の血が見たくなつたらうと思ふのでした。

このいひつけを聞きますと、何事にも従ふ役人共はすぐに町へ出て老人を二人程つかまへて来ました。そして宥してくれといつて泣き叫ぶのも構はず、禍の鼻先に押しやりました。肝腎の禍はそんな人には目もくれずに、却つて自分の方からその可哀相な達を避けて怪我をさせないやうにしながら、ます／＼烈しく暴れ狂ひ始めました。そしてだん／＼とその太い毛綱を引き千切らん計りに荒れ狂つて、やがて庭先に出て眺めてゐる達婆王に飛びつかん計りの有様で、庭の砂を蹴立て、達婆王の顔を目覚めてあげせかけては、家も覆ふばかりの聲を揚げて吠え出しました。

是れを見ると、氣の短い達婆王は一時にかつと怒つて、「怪しからん獸だ。人がやる物は喰べもしないで、その上自分に砂をあびせかけるとは不埒な奴だ。丁度食物のなくなつたのを幸ひ、誰かこの獸を刺し殺せ」と大きな聲で嗷鳴

の仰を採して與へて見ろ」といひつけました。

翌日になつて掛りの役人は、鐵がなくなつた上は、同じ堅い物ならば、石か瓦でもいゝだらうと考へて、最初に堅い石を與へて見ましたが、禍はそんな物には眼もくれないでだんだんと暴れ始める様子が見えました。

役人共は、いよく鐵がなくなつて暴れられてはしつめることも出来ないと思ふと慌てふためいて、今度は犬や猫の類をつかまへて来て、禍の鼻先に押しつけましたが、これとても更に見向きもしないで、たゞ追々に烈しく暴れるばかりなのです。そこで、仕方なく、再び達婆王の前に出てこの事をいひますと、

「は、う、そんなに暴れるか」といひながら達婆王も庭先に出て、その暴れる有様を面白さうに眺めて居りましたが、ふと名案を考へつたやうに、

「なか／＼烈しく暴れるな。石瓦も喰はず、犬猫も喰はないといふならば、此上は仕方がないから、人間を連れて来て喰べさせて見ろ」といひつけました。

達婆王といふ人は、もう心の底まで荒みはてゐるもので、

「私に殺してお目にかかせませう。如何に何といつても高が歌です。これを見ろ」といひながら、その實はさつきから禍が人を喰はないのを見て安心してゐたのですから、劍を持つて向つて行き、やがてその脊中にひらりと飛び乗りました。

達婆王を初め、見てゐる人達はその早業に感心して、今に殺してしまふだらうと眺めてゐましたが、その男が手にした刀で、禍の脊中に突き立てようと突く度に、からん／＼といつて刀は刎ね返るばかりで、之れにいらだつて力を籠めて一突すると、刀の方がほつきりと折れてしまひ、力抜けて立つた所を禍の牙にかつて刎ね飛ばされてそのまゝに死んでしまひました。

それを見ると、また一人の武士が現はれましたが、平素からの弓自慢らしく、強弓に矢をつがへて、うんと引き絞つて、ひやうと放しました。すると、その矢も禍に當りました



が、かちんといふ音と共に烈しく刃を反つて来て、弓を持った武士の胸にぐさつと立つて、その武士は自分で射出した矢先のために、自分の命を墮してしまひました。

これを見ると流石強情の達婆王も、口惜しさと思ろしさが一時に胸にこみ上げて来て、途方にくれた様子でしたが、やがてまた何事か考へついたらと見えて、近侍の者を呼びよせて、

「今度こそ好い考へが浮んで来た。これなら、必ず間違ひはあるまいと思ふ」と自慢らしい顔をして、「それはこの庭先に十間四方程の穴を掘つてその中に百俵位の炭を入れて、火の池を作り上げるのだ。さうしてその中へあの禍を追ひ込んだら、如何に金銀で造つたやうな身体でも、溶けないといふ事はよもあるまい」と鼻高々とひました。

「成るほど、玉様のお智慧には、あの禍も敵ひません」と侍共はお世辭をいひ／＼引き退つて、人足を呼びよせ、庭先に大きな穴を掘り、その中に澤山の炭を空けて、火のついた松明や何かを投げ込みましたので、間もなく炭は炎と成るこつて来て、庭先はまるで火の池のやうになりまし

た。その時、「さあ今だ」と達婆王が命令をしましたので、多くの人が手綱を引いたり、後から追ひ立てるやらして漸くその禍を火の池の中に追ひ込んで、尚ほその上から炭といはず薪や籠菜の類まで、穴の面の埋るほど投げ込みました。そして、「もうかうなれば、いくらあの禍でも、助かることはないだらう」と、口々に云ひながら、遠くの方に環を作つて、穴の上を眺めてゐますと、不思議な事には、少時の間は穴の中で動くやうな様子もなく、ちつと靜かにしづまつてしまつて、薪や籠菜が物凄いはかりにほう／＼と燃え上るばかりでありました。

「どいっだ。今度こそあの禍もいよく參つたと見える。如何に強いといつても獸だ。人間の智慧には敵はないものだ」と達婆王は得意氣にいひながら、猶も穴の面を眺めてゐますと、その聲の終るか終らない中に、穴の中で、それは／＼物凄じ地雷火のやうな響をたてると共に、燃え上つた炭や薪を四面四方に勿ね散らしながら、全身真赤な火となつた禍が猛然として飛び出して來ました。

これを見ると達婆王初め一同の者は、生きた心地もなく、

眞蒼になつて我れ勝に憤てふためいて逃げ始めましたが、獸はそんな事には一向構はず熱鐵のやうになつた身体でそこら中を荒れ狂ひますので、それに觸つた者はすぐに焼け死に、建物に觸れた處には火が移つて火事となり、さしも豪華を極めた達婆王の宮殿も瞬く中に焦熱地獄のやうな有様になつてしまひました。

達婆王は、どうかして自分だけでも逃れたいと焦躁の中に、禍が飛込んで来て一氣に焼き殺してしまひその他の武士も家も見る／＼中に焼き盡されてしまつたのです。たゞ不思議な事には、平素から心掛のよかつた人達だけは、この獸はちやんと見分けて助けて行つたといふことです。そしてこの宮殿が、焼け落ると禍は都の中を馳けめぐつて、都中を火としてしまひ、やがて私良摩の國中を馳けめぐつて、何處へ行つたとも判らなくなつてしまひました。それで善い人は火事の中に他の國に逃けてしまひ、悪い者は火に焼かれ煙に巻かれて死んでしまつて、一時は盛んであつた私良摩國も、ただこの一匹の禍のために、僅かの間に焼け土ばかりの、哀れな有様になつてしまひました。(なほり)

草の音

人見 東明

父さん遅いよ

たゞひこり

提灯つけて野の道を

そよ、そよ、そよ

草の音



さら、さら、さらさりと水の音

水の音にも身をすくめ

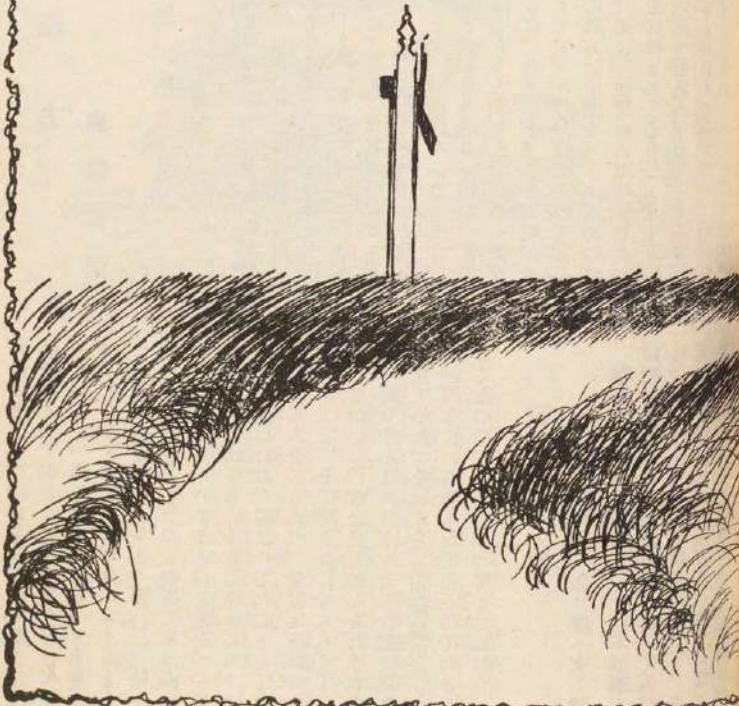
父さん、父さん

よびながら、

暗い野の道

とぼ、とぼ

母のない兒は淋しがる。





幼年詩
若山牧水選

夏が来た (賞)

香川縣木田郡 香西清

夏が来た
由良山の石切場が
光つてゐる

群、短い言葉の中に夏の景色がはっきり
見えてゐる。(牧水)

ざんざんざ (賞)

栃木縣鹽谷郡鹽 遠藤武治

ふるふる雨が
ざんざんざ
あかりがついても
ざんざんざ

いつけんや (賞)

山梨縣北巨摩 丸茂すみ子

高の中のゆうどうさん
田んぼの中のしやうへいさん
いつまでたつても
いつけんや
ほんとに
さびしい
ことだらう

黒板

香川縣木田郡 國方ハルエ

黒い黒板に
黒い影がうつつてゐる
硝子戸あいてゐる

評、實によく斯うした静かなところを見
つけましたね。(牧水)

白帆

香川縣木田郡 神内ミエ

綴方 編集部選

馬 (賞)

東京芝罘三田 鈴木利明

それは夏の夕方、涼しい風が吹きは
じめた時であつた。僕は使から歸つて、
どれ顔でも洗はうと洗面器を手にする
と、「アー」と武ちやんがいきなり飛
びついた。しまつたと思つたがもうおそ
かつた。「ポーポー、ポッポ」と武ちやん
は表をさす。僕は汗をふきもしないで武
ちやんと一しよに通りへ出た。南海學校
の横を通らうとすると、わめく聲が高く
きこえた。ひよいと見ると、馬が太い竹
でビチャビチャひつばたかされてゐる。も
一人の馬方は手綱をダイダイ引つばつて
ゐる。馬は一生懸命あせつてゐるが、う
んと砂は積まれてゐるし、片つ方の車は
ひくい所へ落込んでゐて、どんなに力を
出しても車は中々動かない。馬方は眞赤
になつてビチャビチャと汗を流す。馬は

遠山君の父 (賞)

北海道函館區函 西塚文雄

龜田村の収入役逃亡す。といふ標題で
新聞に遠山君のお父様の事が書いてあつ
た。僕はびつくりして讀んで見ると、遠
山君のお父様が三千六百圓を持つた債行
が不明になつたとの事である。新聞には

酒も飲まず實直で村人の受けも良かった
ので原因が不明であると書いてある。子
供は廿三を頭にして工業學校に通つて居

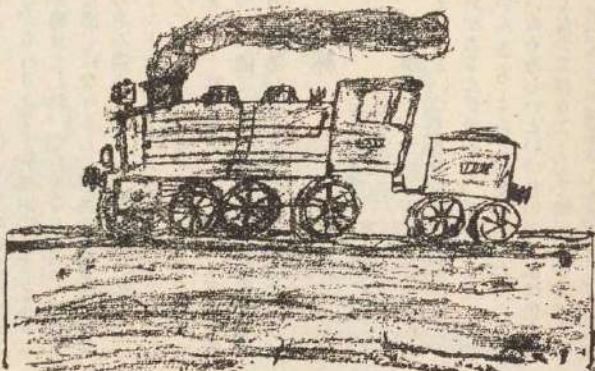
るのもありと讀んで行つた群、僕は遠山
君の顔を思ひ浮べた。可愛い顔をして小
さな遠山君はどんなに心配をして居るだ
らうと思ふと、黙つて居られなくなつ
たので、小母様に話をすると、
「どんなに固い人でも金の爲には」と
言つたので、しやくに觸はつて外に出
た。

遠山君のお父様は何故そんな事をし
たのだらうと考へ乍ら、遠山君から貰
つた草履の緒をいぢつて居ると、去年
の春の事を思ひ出した。僕が遠山君の
家へ遊びに行くと、遠山君のお父様が
お菓子を持って来て「泊つて行きなさい。
い。」と言つたがあの時のお父様と逃
けたお父様とは違ふ様な氣がしてなら
ない。遠山君のお父様は何故小母さん
や遠山君達を泣かせるのであらう。

お使の歸り (賞)

東京府瀧野川 森田義三

僕がお母さんのいひつけで勤坂へお使
に行きました。行きはそんなに暗くはな



汽車 (賞) 東京府杉並村 長野英夫

橋の上から向ふを見ると
姿は見えぬど
白帆が一つ
向ふの橋を通つて
居る様だ
評、よく述者に歌つてあります。(牧水)

ひぐらし

府下北多摩郡 多摩校三 村野 儀一
かなかなとひぐらしが
うらのお山で
ないてゐる
たいやうほんやり
しづかに
空にありました。

からす

北海道室 中 西 重 作 (十四歳)
評、しづかなく夏の夕暮。(牧水)
坊やが
こはんをたべる時
おはなをたべる時

初 秋

栃木縣宇都宮 大久保 文 雄 (十五歳)
市外一ノ瀬

法師蟬
梢にないて
教室の
窓に
淋しく
秋は来た
評、すこし大人の口調じみてるが然し面
白い。(牧水)

夏

元街小学校 鈴 木 重 夫
高等二年生
寢ようとして
横になつたら
耳をかすめて
ブーンと、一匹

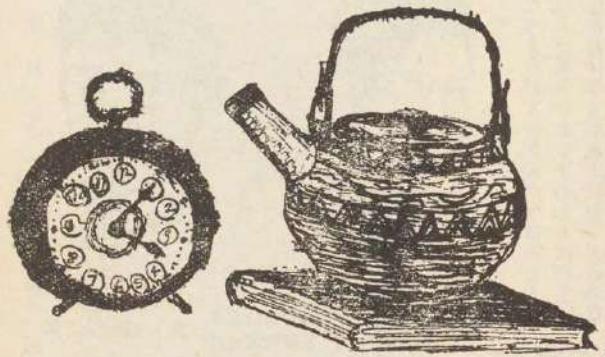
かつたのですけれど歸りは眞暗でありま
した。一人でとほくと暗い道をたどり
ながら行きますと突然木の上でかなかな
が鳴きました。なんとなくさびしいやう
な感じになりました。僕は歌を歌ひなが
ら足を速めました。すると向ふの方でフ
ーンと云ふ大きな音がしたのでかけて行
つて見ると子供が七八人で花火をしてゐ
ました。私は暗いのでさつさと其處を通
つて大通に出ると向ふから竹内君が来た
のでお話しながら家の前で別れました。

妹

愛媛縣越智郡 宮道 マサ子
富田校六
私が學校からかへつてたゞいまかへり
ましたといつて笠をおかうとした時に、
おかあさんが色をまつさをにしてまさこ
いんまらとみこの足い針がたつたんぞ
いおそろしいといつたので、私は色が青
くなつてびり／＼して物がいへませんで
した。そこへ種子さんと松枝さんと来て、
おばさん針がたつたんかんほんとうにあ
ぶないのおといひました。松枝さんや種
子さんは色を替へてほん／＼とどうす

もて、そいざりきづかうんよ。岡田のを
ばさんも去年針がたつたけど、いにい
たらたつた時にもいたあなし、ちいとい
てもいたあないけん、ほんのこはんをた
いたり、ばんにはよなべまでしたけんど、

どうもないけん、よなべをおいてねてち
いとなひだ、すと足がさく／＼して、
足をうづんどりやにやこたわんものちや
けん、うづんでそのばんびとよささうや
つてあかしたいのお、しやけんこいさを
まつとおゝみないふたけ



一 英 崎 岡 (賞) 計時に本にんびど

東 本 京 東
郷 町 郷 郷
九 町 郷 郷
ん、こいさをまぢかねるの
よとたねこさんやまつえさ
んにいひました。その内み
んなはかへりました。だん
だん日がくればんのこは
んたべてすこししてねまし
た。おかあさんやおとうさ
んはきづかうて、夜もろく
にねないで神さまにおたの
みしてゐました。夜中頃と
みちやんあしはいたいとかと
いつたら、うゝんひとおつ
もいたあないといつたの
で、おかあさんやおとうさ
んは、ほんならもうのこつ
とらんのちやわいといつ
つとらずに、ほねやすちの

蚊が通つた

テン

慶應義塾幼
稚舎一年

柳 武彦

テンハアカルイ

アカルイナ

ツキトクモトガ

ニラメツコ

シテル

いたぢら蟻

仙臺市大町
五丁目

木村よたろ

いたぢら蟻が
ぢ蔵さんの前を
通つて逃けた

ぢ蔵さん

だまつて

しらん顔

ぶんぶん

大阪府東成郡
小阪村小原

大塚 義博

がらんがらんと
ぶんぶんが
電氣とけんくわを
してました

わらび

山梨縣北巨摩
郡多摩校尋五

太田 清

わらびとりにつた
たいへんとつたが
こはいといつて
わらびをぶちやつた
くらうしてとつたわらびを
ぶちやつた

さんじつのもんだい

山梨縣北巨摩
郡多摩校尋六

興水かね子

毎朝、
きてみれば
うしろの小さい
こくばんに
さんじつのもんだいが
かいてある
しつかと思つても



(賞) 顔の兄と父



枝 玉 谷 廣

上へたつとらいでよかつた、ほんとうに
おかげよ。又ちいもですあともはれすい
よいよおかけなもんよといつて、みんな
はよろこびました。

嬉しかつたこと

大阪府西區九
條第一校尋六

藤原 義春

大正十年八月の或日の事であつた。
朝食をすまし、いつもの様にじんべを
着け、水泳袋をかけて發電所に集つた。
それから先生に連れられ「こうろ園」
で電車を下りた松原通りを通り、海に
出た。

やがて道場へ着いた。それからさま
りの場所に着物をぬぎ、ふんどしをし
めた。體操がすむといつもの様に手の
指を折つたり。足を曲けたりして注意
した。先生の「はひれ」の號令に皆は
一散に海の中へ飛び込んだ。ちやぶ
ちやぶと音がしたと思ふと、もう土肥
君等は泳いでゐた。

僕はまだ少しも泳げないからいつも
の様に海岸で顔をつけて鳥の行水の様
にちやぶちやぶといはしてゐた。此の
時僕は「何時もこんなことをしても駄目
だ」そして「一つ顔を上げて見よう」と
思ひ、少々水を呑むのは素より覺悟で、
思ひきつて顔を上げて見た。すると、あ
つ……不思議……深く……進む……夢か
しら、でも、もう一度やつて見よう。再
び足を砂からはなした。やはり深く……

進む……前と同じで、少しもかはらない。
あつ……僕は本當に泳げるのかしら、ど
うもさう思はれて仕方がない。だが何度
やつても同じだ。やはり泳げる。僕はあ
まりの嬉しさに、ちつとして居る事が出
来なくなり、早く先生や友達に知らせた
いと、一散に先生の方へ行つた。先生に
近づくとすぐに「先生泳げました。見て
ちやうだい」と云つて泳いだ。先生は、そ
れでよろしい」と云はれたので、愈々自
待遠しかつた。

蛇

京都府中郡
三重校高一 澁谷文明

僕は學校から晝御飯を食
べに歸つた。家の門口まで
來ると弟と兄さんが上の方
を見てゐた。僕が「何が居
るんだ」と言ふと、蛇が居る
んだ」と答へた。どこに居
るだらうと思つて屋根裏の
方を見ると一匹の大きな蛇
が頭をニューウと出してる
た。すると兄さんが「せん



寫眞 (賞)

野縣飯
田校尋四

山田 明

しなんでゐると
あとからきたしが
してしもう

櫻んぼ

茨城縣結城郡
上山川校尋六

山口喜一

くろみをもつた
櫻んぼ
今二三日で
たべらいるな
たべるとくちべろ
赤くなる
牛屋のうらで
考へた

犬

茨城縣北相馬
郡普生校尋六

會持精一

犬んちきしやう
ほえやがつた
こなひだの朝
ほえやがつた
ほえん中で
ほえやがつた

眞書

東京本郷區
駒本校尋六

早川巨萬子

静かな眞書
ばけつの中の
鯉がビチャリと
音を立て、
はねかへつた
午後一時半

時計

東京府北豊島
郡志村高二

福田六重

休まずに
カッチンカッチン
やつて居た時計
今日は暑いので
とう／＼休んだ

雨だれさん

やぶ田満佐子

雨のふるばんに
雨だれさんが
きれいなべきて
ひとほして
私のおうちへ
來ましたわ

清さん(畫)

京都府中郡
三重校高二 鈴木仙三



こを三本取つて來てくれ」と僕に云つたので「ヨッシ」といつてせんこを三本取つて來て兄さんに渡すと兄さんは長い竹の先にさして火をつけた。せんこからは盛に煙が上る。香がする。そして蛇の頭へやつた。すると蛇は頭をひつこめてはひだした。僕は「ごはんを食べんなんだ」と思ひついた様に云つた。弟も「うんさう／＼たべなんだ」と云つた。僕と弟とたべてゐたが弟はすぐじたと見て見

ねずみ

山梨縣北都留郡
賣里東校高二 保坂あき子

或日、私はおしみのへらをしようと思つて、板の間の所へ行くと、ひらきの戸の所にひよつと黒い様な物が見えたので、ふり附つて見るとねずみであつた。

見たばかりの時は死んで居たと思つて、其のまゝいつてしまつたけれど、又歸りに見ると、苦しうにいきをして居た。私はこはくなくて來たので、其のまゝ店の方へいつてしまつた。後でねずみはにけてしまつたかと思つたが、もしもたら殺してみたいと思つて又いつた、するとねずみは、まだ苦しうにいきをして居た。私は静かに物指を持つて來て、たかうとしたけれど、こはくなくなつたので

隣の家について見ると、定一さんや信ちやん等大勢居たので、其の事をあかすと、皆「どこに／＼」といつて大さわぎをして來た。定一さんは「そうとしろ／＼」といつて、ねずみの所へ來た。一番先に信ちやんがうなぎをつく物で、きゆうとねずみをつくと、ねずみはチュ／＼チュといつていたがつた。其の後で定一ちやんが釘の三本通さつたきりの様な物を持つて來て頭をついた。ねずみは段々と苦しうなつて來たので、チュ／＼チュとないた。私はこはくなくなつたので、少し後の方へさつて居ると、母がそこへ來て、「なんで、ねずみ、どこに居た」といつて聞いたので、皆がこゝに居たといふと、母は「こゝすならよく殺しきらないと後でたゝるからすつかりころしてしまえしよ」といつた。皆「はい」といつて其のねずみを川の中へ入れていぢめると、ねずみは苦しがつて死んでしまつた。



家(賞)

三重縣桑名郡桑名
町立第二校尋六 山本重雄



トンボの一生

梅田三良 (十四歳)

私はもと、池の中に住んでゐる見苦しい蟲でありました。私は小さな魚や蟲を食物にしてはその日その日を暮してをりました。

或夏の暑い日の事です。體がもつ／＼するので池からはひ出しますと、不思議にも今まで着てゐる青い皮がぬけてしまひました。その時私はびつくりしました。どうした事だらうと思つて池の水にうつして見ると、今までの見苦しいすがたは、四枚のすきとほつた水晶の様な羽が生えて、大きな目が二つあり、立派な尾と六つの足とをもつた美しい體に變つてゐました。その美しさに自分ながら感心してしまひました。

ちよつと羽を動かして見ると、ヒューと空中に飛び上りました。「おや／＼なかしいぞ、不思議だな」と思はずさげました。そこでつづけて五六度動かすと、軽い早さでヒューと屋根の上に飛び上りました。見るものが皆めづらしいので大きな目を一層大きくして四方を見廻しました。今まで自分の住んでゐた大池は下の方に見え、高い木だと思つてゐたナンテンの木も真下に見え、空中を我もの顔に飛び廻つてゐた蚊も下に見た時の愉快は、たとへやうもありません。私は天下を取つたやうな氣持で飛廻りました。

すると向からやつぱり私と同じ形をした人ほが來ました。向から話をしかけた。「やあ、今日は。今日は天氣でけっこうですなあ。」と云つて、私の體を見てゐましたが、さもをかしいといふ様に、「君は生れたてですか。」と私をばかにしたやうな口ぶりといふので、ぐい／＼とさばりしましたが、がまんして、「エ、私は生れたてです。なに／＼かめづら

てしまふさうだからよく／＼氣をつけなさいよ。あぶないからそれ」とその外あらゆる事を教へてくれました。

聞かうと思つてゐた事はすっかりわかりましたので、私はあつ／＼とお禮を申しました。それで世の中を渡つて行くのに、鬼ばかりはゐないと思ひました。顔がみにくいから悪者だ、きめてはならぬと云ふ事を強くかんじました。私は非常にお腹が空いてきましたので、鼻さきへ飛んで來た蚊を一匹とらへて食べました。そのおいしい事つたら、ほつべたが落ちさうでした。かういふふうには私は幾日も幾日もをすごしました。或日の事、天氣がよいのでふわ／＼とそこいらを飛んでゐましたが、つまらないので遠くまで行く事になりました。途中原を通る時、恐ろしい人間が長

してしまひました。

ちよつと羽を動かして見ると、ヒューと空中に飛び上りました。「おや／＼なかしいぞ、不思議だな」と思はずさげました。そこでつづけて五六度動かすと、軽い早さでヒューと屋根の上に飛び上りました。見るものが皆めづらしいので大きな目を一層大きくして四方を見廻しました。今まで自分の住んでゐた大池は下の方に見え、高い木だと思つてゐたナンテンの木も真下に見え、空中を我もの顔に飛び廻つてゐた蚊も下に見た時の愉快は、たとへやうもありません。私は天下を取つたやうな氣持で飛廻りました。

すると向からやつぱり私と同じ形をした人ほが來ました。向から話をしかけた。「やあ、今日は。今日は天氣でけっこうですなあ。」と云つて、私の體を見てゐましたが、さもをかしいといふ様に、「君は生れたてですか。」と私をばかにしたやうな口ぶりといふので、ぐい／＼とさばりしましたが、がまんして、「エ、私は生れたてです。なに／＼かめづら

◆童謡(二部) 野口雨情選

青いぐみ

山梨縣 山本みさへ
青いぐみたべた子は
にがいかほする
赤いぐみたべた子は
あまいかほする
赤いぐみむしれ
青いぐみむしつちよ

水玉

愛媛縣 妻島英男
ほつとり／＼
降る雨は
芋葉の上に一つべおちた
二つべおちた
六つべおちた
お棚のりんご

東京府 渡邊西造
コロ／＼りんごコロりんご
お棚の上からコロ／＼
チヨロ／＼猫よチヨロ三毛よ
りんごのあとからチヨロ／＼

篠原先生

埼玉縣 栗野劍一
篠原先生に
もらつた手紙
おれはうれしくて
たまらない
又原稿を送つて
やつかな

屋根

千葉縣 松本和
古い小屋根が
ありました
草がもう／＼

私はあわて、飛び上ろうとした時はもうおそかつたのでした。いやつといふ程私の頭をなぐつたので、私は目がくら／＼として氣絶してしまひました。

ふと気がついて見ると、自分ほせまいかごの中にいれられてゐました。前には池がありました。自分のすがたをうつつて見ました。先に池にうつした時はそれは／＼美しくありましたが、今見るとどうでせう。立派な羽はぼつ／＼にさけ、尾はとれかゝり、自慢の大きい目はべこんとへつこんでゐました。



バラ子さん

野村蝶子

位アコリヤシナイノヨ。オ手紙カイヨラ又トロウト思ッテルノ。

「こゝまで書くと窓の側にある本へ蟬が一匹止つて、『ジシー』と鳴き出しました。

「アラ蟬が——」バラ子さんが思はず叫びますと、蟬はなきやみました。バラ子さんは、お手紙を書いてしまはなければと思ひなほして、うつぶしてどう書かうかと考へて居りました。

少したつて蟬が又鳴き出しました。その鳴聲が「バラ子さん」と云ふ様に聞えました。バラ子さんは顔を上げて蟬を見ました。蟬はびよんとお机の上に飛んで來ました。

「オアオチャン」蟬はさう云つて、バラ子さんの方へ頭をかたむけました。

「おぢやうちやん貴女は賢いのね。だから私がこれから海水浴に、つれていつて上げますよ。さあ私についていらつしやい、早く／＼」といひました。

バラ子さんは、海水浴ときいて、うれしい様な又こほい様な氣がしました。バラ子さん

バラ子さんは八ツで一年生です。一學期も終つて、楽しい夏休みになりました。バラ子さんは毎日蟬取をします。捕蟲網を持つて、お庭へ出て蟬をさがしましたが、まだ一度も捕へたことがありません。

或日、バラ子さんはお姉様の所へお手紙を出さうと思つて、インクとペンと用箋とを持つて、お兄様のお机に向ひました。そして丈夫の高い椅子にこしなをかけて書き出しました。

オネエチャン、長イアイダオ手紙チ上ゲマセンデシタラネ。勉強ガイソガシカツタンア出セマセンデシタノ。オコツテルンダツタラ、カンニンシテテウダイネ。アタシコノ頃セミ取リシテルノヨ。ダケドチツトモ取レヤシナイシマスモノ。イヤニナツチヤツタリ。昨日モネ、桐ノ木(ホラオ池ノヨコニアル、オ姉チャンニヨク御本ヲ見セテイダイダトココ)アスコニ一匹ホタノ、取ラウト思ッテ上バツカリ見テ歩イテキタラ、トウ／＼オ池ヘハマツチヤツタノ。ソシテ、セミン「ジイー」トイウチニダチヤツタリ。ダケドアタシソノ新

は蟬のあとに從ひました。ふとみますと、もうそこは海岸でした。バラ子さんは、あまり嬉しいので蟬のことも忘れて砂の上をあらこちらと飛びまはつて居りました。

しばらくしてバラ子さんは自分のあとにもよこにも蟬の居ない事を知りました。「アラッ」といつてあたりを見まはしましたら、今まで泳いでゐた人も遊んで居た人も、だれも居りませんでした。バラ子さんは悲しくなつて落ししやがんでゐました。

その中にだんだんと暗くなりました。そして黒い大きな波がものすごい音を立て、目を開いてゐるのも恐ろしい程でした。

バラ子さんはしく／＼と泣き出しました。「ザア」と大きな波がよせて來たかと思ふ間もなく、バラ子さんは、ビショ／＼になつてゐました。

「アラ！ 助けて。」と思はず叫びました。ふと目をあけて見ると、バラ子さんはお机にうつぶしてゐて、インクがひつくりかへつて、手が青くなつてゐました。(をばり)

生いてゐて花が咲いてゐた
夕やけ赤やけ
長野縣 松澤 寛

夕やけ赤やけ
倉の白壁
赤やけだ
倉の瓦屋根黒やけだ
アアイソラ
山梨縣 八卷ミユキ

カゼガソヨソヨ
ファイテキタ
アアイソラハ
チラチラクモガ
トンデキル
ふくろふ
新巻 風岡 健司

森のふくろふは
まるい目玉
いつもふくれた
まんまるからだ
夜になると光る目玉

月夜
山梨縣 藤本 光雄
いい月夜だ。
となりのぢいさん
ほうかむりして
やつて來て、
甲東館のかめに
ほえられた

お山の向ふ
福岡縣 岡崎 幸治
お山の向ふの
又向ふに
大きな大きな
海があるさうだ

お山の向ふの
又向ふに
大きな大きな
海があるさうだ

◆ 童話講演の旅を了へ 沖野先生歸京 ◆

沖野先生がお歸りになりました。五月七日東京驛を出発され、釜山を振り出しに「金の星」講演部を代表して朝鮮



(影撮にて連大) 生先野沖の中行旅

毎日少しのお休みもなく講演して歩きになった沖野先生のお苦勞はどんなだったでせう。しかし、この御旅行によつてこれまで童話が普及してゐなかつた地方迄も、広く普及して童話が如何に尊いものかがわかつたのは本當にうれしき事ではございませんか。

満洲へ向つて約三ヶ月の間、童話講演の旅をつまげられた先生は歸り途に九州の小倉で四回の講演をされたのを最後にして無事御歸京になりました。然るに、やうな朝鮮、滿洲の旅を、毎

朝鮮の子供さんも満洲の子供さんも先生のお話を聞いて雀躍して喜ばれ、「こんな面白いお話は聞いた事が無い」と口々に叫んだといふ事です。今ためしに先生がお歩きになつた土

地を地圖によつて示しますと、次の通りです。

此の間講演をされた数は百七回、聴衆は合計四萬四千人でありました。これを丸の内有樂座に比較して考へますと、有樂座一日の入場人員は約千人でありますから、この有樂座で四十四日間満員の講演會を開いたと同様であります。そして、此の間の三ヶ月間の旅行は沖野先生にとつてもなかく、お骨の折れた事でありませう。鴨綠江上での暴風雨にあはれた時なども、もう全く命がないものと覺悟されたといふ程です。御歸京になつた先生に記者が、お目にかゝつてお話をうかがひますと、「實に愉快な旅でした。暑い事もなかくなかつたのですが、しかし、幸と途中で一度も病氣もしないで殆ど休みなく歩きました。旅をしていろいろ、教訓になる事がありました。朝鮮の子供さん達は實に愛らしいです。」といつて非常な御元氣でした。先生は、この次には遠く南洋の方面へ童話の旅行をつづけられるといつてをられました。



沖野先生がお歩きになつた朝鮮各地の地圖(黒い線は大體の道筋、滿洲方面は略してあります)

◆ 野口先生童話講演 ◆

△中村女學校童話講演會(東京) 深川區中村高等女學校で七月十九日午前十

時より野口先生の童話の講演がありました。野口先生は自作の童話も澤山

朗吟されました。その前に五十嵐麻三先生の齒牙の豫防衛生についてといふ随分ためになる結構なお話もありました。

△上中妻校童話講演會(茨城縣) 七月二十日午後一時より茨城縣東茨城郡西部教育會主催で、童話講演會が開かれ童話教育について野口先生の講演がありました。當日は同縣々視學清水恒太郎先生、奏任校長明間卯之介先生、水戸併置校童話指導長岡裏先生、妻根校童話指導大越親先生、其他新時代の教育に熱心な各校の先生方の來聴がありました。

△日本女子高等學院童話講演會(東京) 府下東中野日本女子高等學院にては英語並に子供服裁縫の夏期講習會を開き一般受講の御婦人方のために、七月廿四日午前十時より野口先生の婦人と童話といふ講話がありました。



通信

自由畫選評

山本鼎

△本月は佳作がない、それに数も少かつた。△鈴木三君の『清さん』居ねむりをばよま...

幼年詩選後

かとも考へます。△吉岡さんの「馬鹿と食ひしんぼう」は面白...

綴方選評

選者

△予あふん澤山の綴方ですから、いつもの通り...

若山牧水

今度、幼年詩の選にかゝると一緒に私は病氣に罹つてこの病院に入院しました。

童話選評

齋藤佐次郎

△推薦になつた江口さんの「蛇のしくじり」は作意の面白味と自然な筆つきを持つてゐる...

新しく出た本

八八

◆神様のお手(水谷まさる先生著) わたしの手をなかに、そして心のなかに、かつて美しく祭えた子供ら...

◆温室の花(川路柳虹氏著) 優れた抒情詩人として、若い人々の憧憬や悩みを一身に引受けて居る著者が...

◆日本童話寶玉集(下巻)(楠山正雄先生著) 日本で発行された童話集で、何が最も立派なものか...

生(の)筆に成り、外の挿畫は早川桂太郎氏の筆で面白く書かれてあります。

がんきりお眼々

これは野日雨情先生の童話を作曲家として有名な室崎琴月氏が最も努力して作曲された童話曲譜です。

童話掲載外佳作

望遠鏡と牛(伊藤一雄) △馬鹿と食ひしんぼう(吉岡伊三郎) △美緒ちゃんと百合子(田中みづ子) △鏡鏡(竹川佐登志) △悲しい便り(都外川淳) △化された伊作(吉田六花) △彫刻師市左(川崎幸次郎) △魔術師の過失(戸崎晴代) △散りゆく楓(松原秋花) △霧がけ島(牧野眞砂子) △三人の兄弟(田口黄鳥) △悪い老人の最後(松村淑郎) △五色の光

十分の意味が出ておりました。
△保坂さんの「ねづみ」は読んでみて可哀さ
うでたらない氣を起させます。チユー、
と聲がすぐ目の先で聞えるやうな氣がしま
す。それだけ文章が巧いのだと思ひました。
(齋藤生)

鴿の手帖

△童謡哀話といつ
たら、皆さんはへ
エあの無邪氣な童
謡に哀話があるの
かと驚かれるでせ
う。ところが本當
にあつたのです。
それは童謡校とし
て有名な茨城縣の
若柳校の近くにつ
いて此頃あつたお話
です。若柳校のお
たりばそれは、
驚くほど盛に、童
謡が語られていま
すが、こゝに若柳校長の久保田先生の御孫さ
んに、稻子さんといふ三つになる女の子が
ありまして、
△この嬢ちゃん病氣になつたのです。とこ
ろが病氣はだん／＼と重くなつて、たうとう
お醫者や藥の効もなく、もういよいよ最期だ
といふ時になつてしまひました。お父様お母
様はじみじみお涙を流して居りました。



庭家と先生野神た着を服鮮朝

ると、稻子さんはいふに口を開いて、「から
すなぞなく……」と唄ひ出したのです。みん
なの方々の驚きはどんなだつたでせう。それ
もその管です。まだ口もろくに廻らない稻子
さんが、いよいよ息を引きたいといふ時に
「からす……」と唄ひ出したのです。
△「からす……」と唄ひ出した時、稻子さんが唄
つた歌は何んであるか皆さんは御存知でせう
か。若柳校のあたりの子供さん達は誰一人知
らない者がありません。三つになる稻子
さんでさへ知つてあ
たのですから、さて
その歌は、皆さん何
ていふ歌でせう。そ
れば野口雨情先生の
童謡「七つの子」で
ありました。
△あのいつもニコニ
コ笑つてシャレばか
り言つてをられる沖
野先生が、朝鮮で童
話講演中演壇から引
き降されたといふ珍
談があるのです。それは朝鮮の山の中の山村
へ行つた時の事ですが、沖野先生はその地に
ある大人のために一と晩講演をするはずで
かれたのですが、行つて見ると、可愛い子供
さん達が群はさうに七八人その村に遊んであ
るのです。沖野先生はその子供さんを見て可
哀想に思ひました。さう面白お話を聞く事
が出来ないで居るのだからと思ふと子供の次
行して居ますが、それに要する費用は村會の
決議で全部村費で補つて居ませんか。童謡に理
解ある美しい村ではありませんか。

童謡の選後に

野口雨情

好きな沖野先生は、びつとして居られなく
つて其處にあつた七八の子供さん達を集め
て、直ぐ御自分は演壇に立つてお話を始め
たのです。子供さん達はどんなに喜んだ事
でせう。みんな夢中で聞いて居ます。そのう
ち大人の會を開く時間が来ました。しかし
沖野先生はお話を始めてしまつたものでは
から止めずして居ますと、待ち兼ねてゐた
大人の一人が「はやくやめてくれ」とどなり
ました。しかし、沖野先生は「もう少しです
から待つて下さい」といつて、なほお話を、
つづけて居ました。お話が丁度一番の面白い

金の星

誌友募集

とこへ来てゐるので、子供さん達は目を見
はつて夢中で聞いて居ます。
△ところが、待ち兼ねたきつきの大人の
人、すか／＼と進んで来ていきなり沖野先生
を境の上から引き降ろしてしまひました。ハ
ッハッハ、と降ろされながら沖野先生が
笑つておゐてになつたので、一層面白い光景
であつた。引き降した人は却つてがカンとして
ゐたさうです。
△山梨縣の郷土童謡協定校として知られてゐ
る北巨摩郡の多摩小學校では、「ねづみ」と
いふ標題で児童創作童謡を發表する雑誌を發

と云ふ通信も一二小學校の先生から来てをり
ます。
△それから次に、調律にのみ重きを置く童謡
は、内容が、からつぽであるから藝術的に無
價値であるといふ意味がある人が、ある雑誌
に書いたさうですが、それも正しい考へなの
でせうか、その點についておたづねしますと
云ふ通信も矢張り小學校の先生から四五通來
て居ります。
△以上三つの通信については、だれがそんな
考へをもつてゐるのか、何雑誌にそんなこと
が書いてあつたのかわかりませんが、皆様の

「金の星」の誌友には、いろいろの特典が御座います。
今や月々非常な勢で増加いたして居ります。誌友規
則は金の船社宛にお申込み下さいませ。すぐお送
りいたします。奮つておはひり下さいませ。

少年少女童話募集

前から少年少女諸君の自作童話を募集いたし
て居りましたが、八月號からい、作のある時
には毎號出す事にきめて、新たにその欄をつ
くりました。奮つて御投稿下さい。記者

幼年詩掲載外佳作

- 子) △つんぼで困つたね(武藤珍子) △はた織
子(望月清子) △月見草(華村三子) △僕のお
娘(伊藤登良男) △馬ひきさん(平岡芳夫) △
えんとつ(藤森ふじ) △夏(清岡勝男) △
夏の日(清水ヨシ子) △屋根の上の梅子(星
野浩夫) △ふでいれのおえ(中山ゆき子) △ト
シホ(田中トコ) △夏(高田千早) △雨が落
ちてくる(橋本ノア) △父ちゃん(北野夫)
子) △お池(山崎清子) △あり(中島アサ
子) △小きな鳥(森田健) △白鶴草(白鶴思
木) △明日お祭(千葉次男) △はたはたき(鈴
木利明) △風鈴草(山本代造) △岡(伊藤二
三吉)

綴方掲載外佳作

- 山) △夜更けて(神内エ) △猫(福田六重)
田合學生(采田福夫) △夕方(今村シナ) △
夏の景色(飯田春香) △わたい朝(伊藤滋)
△ひりひり(夏目隆治) △家の子猫(加藤重
夫) △友に送る(關谷一雅) △讀本の時間
(岩岡光) △小鳥の卵(西田富巳子) △昨日
のこと(廣江紅) △てがみ(三井とめ子)
山めとうなぎ(藤原清水) △たけがり(別宮
ナスエ) △カラス(宮崎トシツ) △雨の降
つたあと(益谷文明) △にくらしい隣(猪
不破義尊) △水(坂口ナツセ) △僕の先生(鈴
木虎三) △長雨(大久保文雄) △思出の大阪
(三宅隆良) △可愛想な鶏(石堂喜久司) △
火事(水野光雄) △遊いた兒(白柳思水) △
魚つり(宇野種雄) △夏ノ夕(元吉次三郎)
△我が机(松本一良) △弟のきす取り(兼井
一郎) △私の一番好きなもの(大谷藤美) △
平塚から(松本始) △夏休み(兩宮八重子)
△暑いな頃(夕ぐれ) △水島龍居) △夕立(玉
井孝好) △黒川先生(小谷ふみ) △早稲田
とけいお(佐藤竹雄) △十月を待つ(遠山
愛子) △勝ちやん(梅本タケ子) △イイヤ(武
藤珍子) △火事(伊藤明) △お父さん(竹
山武次) △小猫(敷田清佐子) △おまかなな
おとしたこと(阿部早子) △七き弟の思出(白
土嘉雄) △戦争ゴッコ(深林廣吉) △死んだひ
よこ(中野朝子) △雨の日(城井安子) △い

御質問に對して、成るべく簡單に解りやすいやうにお答へ致すこととせよとせよ。

▽詩人であれば、童話の指導が出来ないと云ふことも、童話は教育上不要だと云ふことも、訓練に重きを置く童話は、内容が空想だと云ふことも、皆、一を知つて二を知らざる愚問である。ほんたうに童話の解つてある人

◆金の星出版部を設けました◆

▽本社はこれまでよりも尚一層の發展をするために、新たに出版部を設けて單行本の出版をいたす事となりました。

▽出版部は大取次書店その他各方面の御便宜のために、最も交通の便のよい上野公園前に設けました。

▽出版部の御用はすべて下谷區元黒門町

の賢へのある通り、たとひ、馬鹿々々しい説話にして、まことしやかに、理窟をつけ、ほんたうならしく立てると、千人の百人は、さうかと思ふかも知れませんが、一人の目あきだけはごまかすことは出来ませんよ。

▽今日から、皆様方も、ぜひその一人の目あきとなつて下さい。さうすれば、どんなにさ

なら、そんな馬鹿々々しい説話は、云ひたくとも云へない管です。そんな説話を眞面目になつて云つたすれば、おそらくその人は眞に童話とは如何なるものかを解つてゐないでせう。又、解つてゐる人だとすると何か自分の爲にする考へで、小細工的に云はれたことだらうと思はれます。盲目千人に目かき一人

も、らしい話を聞いても讀んでも、これは説話だなど直ぐ解るやうになり、はアこれに爲にする考へで言つてゐるのだなど、直ぐ解るやうになります。

▽まづ、詩人でなければ童話の指導は出来ないと云ふのは、なぜ説話だかといふと、詩人といふのは、なぜ童話の指導が出来ぬからでありませぬ。大工さんでなければ家を建てることが出来

出来ない、左官さんでなければ、壁をぬることは出来ないといふのと、詩人でなければ童話の指導は出来ないといふのは、全然違ひます。物をこしらへること、物を指圖したり歌へたりすることを同じに考へる人はないでせう。もし、それを同じやうに考へる人があつたら、その人は、餘つほどどうかしてゐるのです。だから私は、説話だといふのです(この項、次號へ續いて出ます)。

ません。野野先生には少しも似てゐません。先生はつとゞ立派です。こんどの雜誌にお寄賞がでる管です。おかげ様で皆様から海や山の面白い、お便りをいたゞきまして本當に有難うございまして。お便りがとゞくと皆で取り合つて拜見したくなりました。

△本年の秋は野野先生も朝鮮滿洲の童話の旅からお歸りになりました。大々的に活動いたす積りです。たゞ雑誌の上ばかりでなく讀者の皆様のためにいろいろの面白い催しをする豫定でございます。さて、どんなものをするか、それももう決つてをりますが、もう少し内所に置いて置きます。

◆岡本歸一

○何と云ふ暑さでせう。東京は九十何度と云ふ温度が廿日以上も續いて、その上雨はちつとも降りません。三十年來の暑さだと申します皆様に生れて初めての暑さでせう。御用心下さい。同人一同元氣です、御安心下さい。

○茨城若柳校の篠崎康君、栗原さく子さん、齋藤延雄君、吉川たみ子さん、栗野直一君、荒井いく子さん、角田三枝子さん、赤萩和夫君、佐口洋一君、深野文雄君、またその外のかたからも御丁寧な御手紙を頂いて、皆様の御親切な心から喜んでをります。有難く御禮申上ます。栗野先生の御指導で森の學校でどんなに楽しい一夏を暮らされた事とせう。その中是非私も一度参りたいと思つてゐます。

○八月號の野野先生の負惜みの挿畫について皆様からどうか感じが野野先生に似てゐるやうだとか似てゐると云ふが野野先生の御願はあゝ云ふお顔とかか私に尋ねて来られますがもしもそんな事が野野先生にでも知れようものなら私がどんな御目玉を頂戴するか分り

△皆様は海や山で思ふ存分にお暮しになつたこととてございませう。おかげ様で皆様から海や山の面白い、お便りをいたゞきまして本當に有難うございまして。お便りがとゞくと皆で取り合つて拜見したくなりました。

△本年の秋は野野先生も朝鮮滿洲の童話の旅からお歸りになりました。大々的に活動いたす積りです。たゞ雑誌の上ばかりでなく讀者の皆様のためにいろいろの面白い催しをする豫定でございます。さて、どんなものをするか、それももう決つてをりますが、もう少し内所に置いて置きます。

△いよいよ、今度は「金の船」の一大發展を實行いたすために出版部をこしらへました。そして、大々的に活動いたすこととなりまし。後から、とぞく、他の社では出せないやうな面白い本を出します。皆様どうぞ御慶後下さいまし。

編輯室より

ふべ(野崎庄太郎) △夕立雨(鈴木信雄) △夜(加藤堅治) △お隣のギキ(佐々木謙三) △夜の雨(吉本治) △お父さんのむかし(佐野秀雄) △謀叛(早川巨萬子) △水泳の出来事(瀧沢誠) △おにやい(鈴木信雄) △雨風(山口克巳) △魚つり(村山信雄) △馬乗の日(日淺文代) △いも子(宇佐見千代美)

▲自由畫掲載外佳作 △土瓶(河村ミサ子) △子守(大野憲一) △人(中田ヨツ子) △置物(松本浦保) △顔(岩崎孝) △三坂谷公園(鈴木仙三) △小供室の机の上(久保田公平) △フイコ(島川文雄) △ゆうのみ湯(松本喜造) △鉢と福壽草(萩原竹一) △犬(はりこ) △伊藤登良男 △とらうろ(二瓶道子) △机の上(高橋久蔵) △秋晴の午後(佐々木友治) △上(杉山薫) △マリヤと聖児(吉野智恵子) △本(杉山薫) △夜(二瓶まさ子) △お姉さん(石山静代) △夜(二瓶まさ子) △オトモダチ(井口兼子) △私の家(長尾敏雄) △僕の兄さん(能登宏次) △つり(松尾金四郎) △田舎の家(島川文雄) △タバコ(太田勝男) △高木神社(宇野浩) △ニコトリ(タカタキミ子) △裏庭(淺井千別) △お内のねえさん(小泉綾子) △大野君の顔(大橋一) △リソゴとミカン(岡山直明) △寒い朝(五十嵐せつ子) △筆入れ(日比定一) △コドモ(小島トヨ子) △オト山(小田アキラ) △みよ子さんの顔(大田みづ子) △床かざり(岡田晃雄) △鉢(大谷善美) △ジロウ(後藤長吉) △弟と妹(石原俊三) △おにやい(後藤長吉) △弟と妹(石原俊三) △おにやい(後藤長吉) △弟と妹(石原俊三)

▲童話掲載外佳作 △月見草(北村草之助) △あんまさん(佐々木さとし) △夜鳥(巨ヶ厨生) △鯛の聲(白石よし朗) △あんまさん(溝口常吉) △かもめ(濱田武四郎) △人魚(笹崎徳太郎) △雨(大橋正憲) △金魚のおばさん(水谷光) △星の國(中川善治) △鯛と鮫(柳友治) △野火(鈴木正五郎) △時計(菅谷徳次) △赤い月(大島重三) △金魚のおばさん(松尾英雄) △雨(西形藤葉) △窓の空(頼母ひで子) △美ちやんの眼と(等々力愛路) △迷子(吉田ふたば) △とんぼ(吉川こういち) △一人ぼっち(鈴木章子) △鬼の病(安藤明) △とんぼ(柳晴) △出舟(岩淵龍太郎) △益(芳田榮枝) △カナク(さん(後藤勝子) △釣鐘草(福田眞砂子)

▲金の星誌友 ○秋田 三上清君 ○三重 宮原しげる君 ○秋田 高桑豊君 ○東京 作間博君 ○群馬 關根モト君 ○東京 隅部藩子君 ○神戶 花岡正春君 ○東京 佐野智恵子君 ○愛知 遠藤守鳳君 ○長野 中村康子君 ○茨城 大車章君 ○福井 川榮正君 ○朝鮮 谷幸子君 ○大島 石井克巳君 ○千葉 増田肇君 ○愛知 小島恭子君 ○神奈川 油木吉太郎君 ○群馬 薄根小學校 ○新潟 杉山辰雄君 ○宮城 辰崎良一君 ○大分 奥田茂君 ○廣島 鶴岡文子君 ○東京 岩田則治君 ○滿洲 早川三郎君 ○(以下次號)



りよだ者讀

「金の星」の記者様、大へん面白い時に「金の船」がやまつたのは、私は悲しゅうなりませぬ。それでも全くやまらないで、あの後にまた別の御本が出ましたのは嬉しゅうございませぬ。義経物語や、父戀しや、家なき子はまだ横いて書いて下さるのですかおたづけ申します。私は昨年からの讀者ですが、岡本先生の氣が大好きです。それから野口先生の童話も大好きです。私は綴方や詩が好きで学校の先生に直していただいて居ります。私の帳には二つまる三つまるをたくさんいただいで居ります。(熊本 林志賀子)

「金の星」のなかによつれ物語や、父戀しや、家なき子があるので、いままよつぱり出てある「金の船」にはありません。お間違にならないやうお願ひします。(記者) ▼キントツ社の「金の船」は非常に御話を悪く書いてありますが、雑誌の悪い事はお話になりません。だん／＼御話の真似をして来ましたが、僕は「金の星」と「金の船」を並べて見て涙が零れました。(北海道「愛讀者」) ▼読者氏とおつちやる方へ申上げます。私が三四年前の中文書文の發行者である事は、偏で

はございませぬ。偽ではないといふ證を、お目にかける何もないのは残念ですが、書初めまたは十四五の時かと思れます。只今その雑誌がなくとも私に忘れて居ります。その中何かの機會でお疑ひの時もございませぬと思ひます。御返事まで。(淺草 伊藤温子) ▼皆様からわざわざ「暑中見舞のハカキを深山にお送り下さいまして、厚くお禮申上げます。お名前を擧げるのですが、紙面がゆるしませぬので失禮致します。(記者)

▼からつゆだと案じて居りました矢先雨が降りましたので、黄金の雨などといつていづれも喜び合つて居りましたら、どう致しまして事でもございませぬ。昨日なんどの恐ろしいありさまと申しましたら、本當にどうなる事かとびく／＼ものでございませぬ。そのため市にもかなりの浸水を見ました。また家屋崩壊などといふ悲しい報知をあらちこにきいて居ります。おかげさまで私は別状なく居りますから御安心下さいませ。御地はいかゞで御座いますか、御案に申上げて居ります。さきほどやうやく青空が見えだした分では又明日も雨が降るで御座いませぬ。先づはおつかひまで(神戸 二瓶けい子) ▼童謡播磨校で有名な若柳校の「蝙蝠の唄」は何處で賣つて居りますが、若柳校のお所は何處ですか。「おてんとさん社」の天江登美草先生、私は「金の船」の創刊號以来先生の御名や美語に接して居りました。その御作の現

た。是迄野口先生の御指導を受けてゐた私は、「おてんとさん」の唄が歌いたくなりなりました。以後御教示下さいませぬか。御許があれば早速御知らせ下さい。とうにお願ひするのでした。未だの先生なのでひかへて居りました。(東京牛込區若戸町七 高橋香) ▼「蝙蝠の唄」は神戸區錦町二丁目一番地米本書店で發行してゐます。定價九拾錢です。若柳校は茨城縣眞壁郡です。(記者) ▼空には黄いろい星が出た。よいの明星大きい星。こつちに輝く金の星

私の家にも金の星 (東京 富岡喜代二) ▼今年三月に生れた子供が泣くとき、私はすぐ野口先生の童謡を誦みます。するとすぐにすや／＼眠ります。就中七月號の「子守唄」が一番有効です。その他「赤い櫻んぼ」「青い空」「日傘」など唄つてやりました。こんな童謡によつて育てられる我子の幸福を喜んでゐます。野口先生本居先生に衷心から感謝致します。(大阪 都外川淳) ▼金の星の特徴を申し述べますと、第一に繪畫の美しい事、第二に作品の優秀な事、第三に紙質の良好な事、第四にひととめにしてある事。(大阪 都外川淳) ▼先生様のお手紙ありがとうございました。私が姉さんの家へ行きまして、私の名前で来たお手紙が、机の上において見ました。かなんたらうと思つて取り上げて見ました。「金の船」社からのお手紙なので大喜びいたしました。でも「金の星」社からのお手紙は、

いかに此の美しいおもしろい「金の星」を愛讀いたして下さる。(前掲 中野梅子) ▼暑くなりました。七月號「金の星」は大變うれしく拜見しました。ます／＼記者様送の御ふんとうないます。上佐はもう東京の眞夏のやうな氣候です。(高知 永橋卓介) ▼記者様本當に有難う御座います。「金の星」は今郵便屋さんが持つて来ました。私にもう駄友になれたのでせうか。私の胸はほん／＼にドキ／＼して居るでせう。九月號の「金の星」の活躍は實に素晴らしいです。目次を見ただけで涙は溢れ出ました。記者様から、山後日譚」を出して居られる田中實様は大人の方ですか。私達と同じ位の方ならば本郷蓋茶町に居られて都文館中學に通つて居られる方ではないでせうか。そしてサザミ會の支部長ではないでせうか。戸塚の桑原長太郎様「金の星」の誌友となられて私も何んかに心強いことでは。記者様御身御大切に(東京 湊守一) ▼から／＼山後日譚の作者は、實をいふと、今「金の星」の記者で、讀者便りなやつてゐる私なのです。(田中實) ▼「青い鳥」以下どんなものが御座いませうか御知らせ下さいませ。(奈良 辰巳田紀恵) ▼「青い鳥」の外に、「玉様の馬」が御座います。その外二種ほど出る筈になつて居りますが、その時は誌上でお知らせします。代價はどちらも一組二拾五錢 送料二錢です。(記者) ▼暑中御申上げます。私は二十人程の可愛いわ子さん方といつしよに十日を過します。

明後日はお會合を小學校で開く予定です。青い目のお人形を唄ひます。千葉にて、まんよる。▼毎月手にする度に進歩を認めます。他の出版者が紛れ易い名を以て發行するののいつつも



(小石川西丸町路傍講演 × 甲野口先生) 苦々しく思つて居りました。この度は何にか複雑した事情のために「金の星」と改題して御立せられた由、その事情は知りませんが兎もあれ「金の星」として新しい旗幟を載して

懸賞創作募集

自由

◆少年少女の創作◆

山本 鼎先生選

若山 牧水先生選

編輯部選

〔注意〕

懸賞は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君のすきなものを諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は、學校や學年(または住所と年齢)とおとさないやうにしてください。用紙は自由畫はなるだけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるだけ原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は九月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は十一月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の船社。

◆一般讀者の創作◆

齋藤 佐次郎先生選

野口 雨情先生選

〔注意〕

童話は二十字詰二百行以内、童謡は十五行以内、優秀な作品は『推薦』または『特選』として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして、入選の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返ししません。

定價堂冊 參拾錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
壹ケ年分十二冊(送料共)參圓六十錢
但し四月號九月號は特別號で卅五錢
年號は四十錢ですから、御註文の際は
この分だけ必ず加へてお拂込み下さい
振替口座東京五九九九六番

〔送〕御註文は必ず前金で御拂込み下さい
〔送〕送金は振替が一番便利で御座います
〔切〕切手代用は(壹錢切手)一割増しです
〔注〕第何巻第何號よりと書いてください
〔注〕住所姓名は必ず書き添えてください
廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年九月六日印刷 總本(毎月一回)
大正十一年十月一日發行(日發行)

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
東京市小石川久堅町百八番地
印刷所 大橋 光吉
東京市小石川久堅町百八番地
發行所 金の船社
振替口座東京五九九九六番
電話小石川五三三八七番

沖で呼ぶ聲



せう? まだ何ともお便りが無いのよ。」と言ひました。
それは丁度冬の初めてでした。権現山の木々の紅葉が美しい夕焼雲に照り映えてある頃、式江は伊吹子と明次を連れて、玉の井橋から東仙寺山の方へ散歩し

沖で呼ぶ聲

伊吹子も明次も、毎日學校から歸つて來ると直ぐ、
「お母ア様、お父様から、お手紙は來ない?」と、問ひました。
其度におツ母さんは、悲しさうな顔をして、「ねえ、何うしたんで

てみると、向ふの畑の徑路を急ぎ足に此方へ走つて来る男を見かけました。

「式江さん……」と其男は麗の所から呼かけました。

「はい、どなたでございますか？」

「私は三輪崎の松島といふものですが、今お宅へ伺ひましたが、お留守でございますので……」

言ひながら松島は小山の頂上へ登つて來ました。

「何か御用でございますか。」

式江は不安らしく男の顔を見ました。

「外でもありませんが、高造さんと私とは子供の時から友達で、仲良くしたのですよ。それで、あの外國汽船の引揚げの時、私は高造さんにお金を七百圓貸して上げたのですが……其の期限が丁度先月の末限りなんで……」

松島は然う言ひ乍ら、懐から大きな紙容を取出して、其の中から一枚の證書を拔出して式江に見せました。

「先ア七百圓のお金を……あなたから借用してあるのでございますか。」

式江は驚いて其の證書を見ました。證書には高造の印も捺してあり、印紙も貼つてありました。

「えエ、誠に濟みませんが、期限が前月限りでございますから、元利合せて八百二十圓を今日頂戴致したいと存じまして。」

松島は赤黒く日に焦けた額の汗を拭きながら、式江の顔を見ました。

「私は、ちツとも存じませんでしたから。」

式江は腰を屈めながら、叩頭を致しました。

「奥様は御承知ございませんでせうが、此の證文に書いてある通り、先月末限

り、八百二十圓御拂ひ下さらねば、あなたの住んでゐらッしやる彼のお家と屋敷と畑とを私の方へ引渡して戴かねばなりませんから。」

「左様でございますか。では一寸お待ち下さいませ。何とかして其のお金を工面致しますから。」式江は聲を頭はせながら申しました。

「では奥様、明日の午後二時にお宅へお伺ひ致しますから、それまで現金を調べて置いて下さいませ。」

松島は意地悪さうに式江の顔を睥め乍ら念を推しました。

「はい、畏りました。」

式江がハツキリ言ひ断つたので、松島も安心したらしく證書を紙容に容れて「では、間違ひなく願ひ致します」と言つて、濱の方へ小山を降りて行きま

「お母ア様？」と言つた伊吹子は、心配さうに、「お父様は、あの人に八百二十圓もお金を借りてゐるの？」

「えエ、さうだツて……仕方が無いワ。明日の二時までには八百二十圓を用意して置ませう。」

式江がさう云つた時、明次は、「お母ア様、僕の貯金を出さない。」と申しました。

「私のも宜いワ。」と伊吹子も言ひました。

「さうしなけりやア、最うおツ母さんの貯金は無いんだから。」

式江は涙ぐんだ眼を俯向けました。三人は黙つて山を降りて家へ歸つてみると、久しぶりに作爺さんが来て表の生垣の所に立つてゐました。

「おう、何所へ行つて來ました？」

「東仙寺山まで……」

式江は俯向いたまゝ答へました。

「一時間程前に三輪崎の松島が来て、あなた方を尋ねておましたよ。」

「はい、山でお目にかゝりました。」

「奥様、あの男は悪い男ぢやから、うツかりすると欺されますよ。」

作爺さんも心配さうに式江の顔を眺めました。で、式江は作爺さんに悉皆打明けて、商造が松島に借金してゐる事を話しました。

「證文を入れてあるなら仕様ないが、其の證文が偽證かも知れんから、明日の二時に、私は此所へ来て、あなたがお金を渡す時、其の證文を見てあげます。

私が来るまでは、お金を渡さないでゐらツしやい。」

作爺さんは親切にさう言ひ置いて歸りました。其晩は伊吹子も明次も、「早く

お父様の居所が知れ、ば宜いかなア。」と、何度も何度も繰返して言ひました。

「ひよツとすると、今晚、お父様が歸つて来るかも知れんよ。明次……ツて言つて、其所の入口へ顔を見せるかも知れないよ。」

明次はそれが全くの空想で無いかのやうに、心の中で、そんな事があり得るのを信じるやうに申しました。

「ねえ、伊吹子……ツて、あの杉垣の所から呼びなされるかも知れないワヨ。」伊吹子も負けぬ氣で然う言ひました。すると、お祖母さんの式江までが、いつの間にか釣り込まれて、「ねえ、濱の所から、おうーい……ツて、お父様のお聲が聞えるやうだワ。」と言つて、耳を傾けて浪の音を聞きました。

「うん、聞える〜。おうーい……ツて、あれは屹度お父様の聲だよ。紅や青の繪の具で、牛若丸の繪を描いた、あのお舟に乗つて歸つたんだよ。屹度さう

だよ。」

明次は縁側の所へ走つて行つて、雨戸を一枚ゴロ／＼と繰開けました。松が枝には鎌のやうな三日月が懸つてゐました。よく霽れ渡つた空には一點の雲もありませんでした。

「こう！ こう！ と鳴る浪の響に交つて、

「おうーい、おうーい。」と呼ぶ人の聲が聞えました。

「お母ア様、呼んでゐますよ。それ、聞いて御覽！」

明次は顔を外に突出して、耳を傾げました。伊吹子も式江も出て来て外を眺めました。

「本當にネ、人の聲が聞えるワ。」

式江は雨戸を開けて表庭へ出て行きました。

「行つて見ませう？ ね、お母ア様。」

伊吹子も下駄の音を冷たい夜の空氣に響かせ乍ら式江の傍へ駆け寄りました。

「行かう！ さ、行かう！」

明次は、おツ母さんの袖に縋り乍ら言ひました。

「ねえ、行つて見ませうか。」

式江は入口の戸を閉めて置いて、伊吹子と明次の手を引き乍ら、濱の方へ出て行きました。松原の丘へ出て見ると、濱には若者が五六人篝火カマドを焚きながら立つてゐました。

「おうーい……」沖の方から微かな聲が風に送られて來ました。

「おうーい、其のまゝにして居ろよ。今に助けに行つてやるから。」と若者の一人は呼びました。

「お母ア様、行つてきいて見ませう？」

明次は式江の袂を引張り乍ら言ひました。

「何を訊くの？」

「あのお舟に居るのは、お父様ぢやア無いかつて……」

「明坊！ そんな事があるものですか。」

式江は叱るやうに言ひました。けれども伊吹子と明次とは、篝火の方へ走つて行つて、

「時也さん……」と呼びました。

「おうい、明坊か。」

時也は長い棒で、篝火をつツ突き乍ら言ひました。

「沖のお舟には誰が乗つてるの？」と明次は眼を輝かし乍ら問ひました。

「誰だか判らない。夕方太地沖から歸つて来た虎どんが、宇久井の沖で、浪に流されてゐる小舟を見たと言つたが、一時間ばかり前から沖合で頻りに、助けて呉れーツと呼ぶんだ。九州あたりから吹流されて来た舟だらうよ。」

「助け舟は行つたの？」

「うん、今二艘漕ぎ出したんぢや。もう今に引張つて来るだらう。」

言つてゐる時、仄かに光る波間にグイツ！ グイツ！ と梅の音が聞えて来ました。

「来た〜、お舟が来た！」

伊吹子と明次とは周章で、浪打際へ走つて行きました。

「おうーい、舟は何うだツた？」

「見えないよ。」

舟の中から若者の聲は答へました。

「見えない？ あの舟は見つからなかつた。」

時也は波に踵を洗はせ乍ら言ひました。

「二十間ばかり向ふに、確か一艘の舟が見えたと思ふんだが、漕ぎつけて見ると何にもありやアしないんだ。」

舟の中の若者は、少しく聲を頭はせ乍ら言ひました。

「舟幽霊ぢやらう？」

砂の上に立つてゐた一人の若者は言ひました。

「さうぢや、舟幽霊の餓鬼ぢや。」と他の一人も叫びました。

「舟幽霊の餓鬼に、えらい目に會つた。あいつは時々人を欺しくさるんぢや。」言ひ乍ら、一人の若者は舟を濱へ押上げました。

「お母ア様、舟幽霊ツて何？」

明次は式江の袖を引張り乍ら言ひました。

「舟幽霊なんて、そんなものは有りやアしないのよ。あれは昔の人達の迷信なのよ。」

式江は小聲でさう言つて、伊吹子と明次の手を引いて丘の方へ歸つて行きました。三人が家へ歸つたのは、もう十時頃でした。

「さ、お寝みなさい。明日の朝はネ、おツ母さんも、あんた方と一緒に郵便局へ行つてお金を取つて来て置かねばならないから。」

式江は獨語ひとりごとのやうに然う言つて、二人の子供を眠らせましたが、どうしたものか朝まで、まんじりと落着いて眠る事が出来ませんでした。

「おうーい……」高造の聲に似た叫びが、風に送られて又た濱の方から流れて

来ました。

『そんな筈は無い』と思つて、うつら／＼と眠りかけると、又た同じ呼聲が聞えて來るのでした。氣がかりでならないので、夜明前に窓と起きて濱の方へ行つて見ましたが、浪の上には舟の影もありませんでした。で、式江は急いで家へ歸つてみると、入口の所に作爺さんが立つてゐました。

『先ア！ お早いのネ。』

式江は頭を下げながら、氣味悪く思ひました。

『奥さま、大變な事でござりますよ。』

作爺さんは囁くやうに言ひ乍ら、式江の立つてゐる所へ近寄つて來ました。

『え？ 何でございます。』式江は胸を轟かせました。

『私は今朝早く鯉魚釣りに出かけようとしたが、あの御手洗の濱に、商造さん

の舟が、ひつくり覆つて浮いてゐるのを見ましたよ。私は吃驚して濱を探して見ますと、こんなものが打揚げられてゐました。』

作爺さんは小い風呂敷包みを差出しました。

『まア！ それは何です？』

『お金ですよ。大變なお金ですよ。』

『作爺さんは口を尖らし乍ら言ひました。』

『どれだけ？』

式江は恐ろしいものを見るやうに、其の風呂敷を覗いて見ましたが、

『あ！ これは私が丁字屋で買った風呂敷です。』と言つて、ワク／＼と身を顫はせてゐました。

『奥様、奥様、早くこれをもつて警察へ行きませう！』

ハモーカー

新輸入荷着特賣

全世界音楽界に於て有名な獨逸ホーナ
ア會社の特製最新流行形直輸入品左の
通り新着致ました何れも得難い品です

複音 ケートカーネ號 吹口二十穴

(註文番號)七十九番 一個 貳圓參拾錢

同 ダイヤバーソン號 吹口二十穴

(註文番號)六十二番 一個 貳圓拾錢

同 レグレッツシヨン號 吹口十六穴

(註文番號)三百十一番 一個 壹圓五拾錢

單音 バツチウス號 吹口十穴

(註文番號)四十六番 一個 壹圓貳拾錢

右送料一個ニ付拾貳錢

爲替の上から元價が低廉なので此際特
賣致します品數に限りがありますから至
急御註文にならぬと品切れになります

東京市淺草區北元町一番地

家庭社

電話淺草三六六九番

—— 聲 音 界 ——

作爺さんは式江の袖を引張るやうにしました。

「えエ、しかし私は……」

「い、え、そんな事を言つちやア居られません。早く〜」

作爺さんに急き立てられて、式江は明次や伊吹子の起きて来ないうちに、用事を済して来たいと思つて、作爺さんと一緒に警察署へ走つて行きました。

伊吹子と明次は眼を覺しましたが、おツ母さんが居ないので、「お母ア様……」

お母ア様……」と呼び乍ら、濱の方へ出て行きますと、漁夫が十五六人、浪打

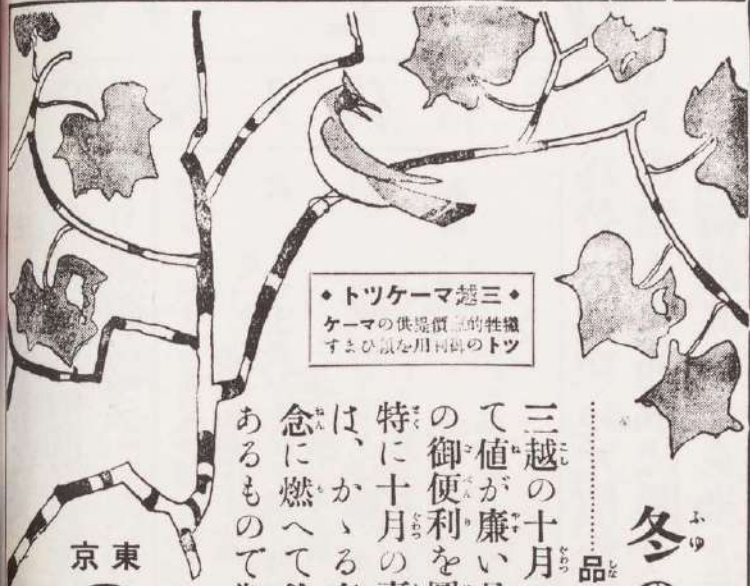
際を右に左に走つてゐました。

「おうーい、明坊！」

呼び乍ら走つて来たのは、時也といふ若い漁夫でありました。

大正十一年九月六日印 大正十一年九月六日印
 三越呉服店 大正十一年十月一日發行(月刊二回一日発行)

東京 金の船社 發行



◆トツケーマ越三◆
 ケーマの供提價上の性機
 すまひ服を用回換のトツ

冬の御支度は

品の良い、値の廉いもの揃ひの三越へ
 三越の十月の賣出しが來ました。品が良くて
 値が廉い品を澤山に取揃へて、お華客様
 の御便利を圖るのが三越の誇であります
 特に十月の賣出し
 は、かゝる奉仕の
 念に燃へて餘まり
 あるもので御座い
 ます

- ◆寄發見切反物賣出し(前より引越)
- ◆七五三祝着陳列(十月二日)
- ◆友誼モスリヤ陳列(同)
- ◆東四大家新作畫展覽會(二十日)
- ◆第五回三彩會陳列會(八日)
- ◆自由畫壇繪畫展覽會(十五日)
- ◆社交畫展陳列(同)
- ◆社紋錦紗モスリヤ陳列(十五日)
- ◆子供洋服展覽會(十五日)
- ◆家庭用品展覽會(十六日)

東京 三越呉服店

十月の定休日 十日 二十五日